

第71次 印旛地区教育研究集会

国語科「話すこと・聞くこと」分散会 提案資料

研究主題

話し手と聞き手のやりとりを通して

協働が実現するような国語科授業の創造

～想像できる話し手と積極的な聞き手を育む～



成田市立公津の杜小学校

国語研究部

～ 目次 ～

1	研究主題について	1
	・本研究を通してつけていきたい言葉の力	
2	研究の手立て	2
3	実践例①	
	特別支援学級『わくわく♪宝探しをしよう!』	3
	指導の実際	10
	実践例②	
	第3学年『スペシャルな読み聞かせをしてもらおう! ～鬼が出てくるお話をします・聞きます・選びます～(学習材 おにたのぼうし)』	17
	指導の実際	27
	実践例③	
	第1学年『もっとしりたいな もり小の先生たち ～「先生かるた」で伝え合おう～(学習材 学校のことをつたえあおう)』	34
	指導の実際	41
	実践例④	
	第5学年『4年生の心に残る! 「日本の魅力」を発信しよう! (学習材 ひみつを調べて発表しよう)』	47
	指導の実際	55
4	成果と課題	61

1 はじめに

一昨年度から国語科を研究教科に定め、「人との関わりの中で自分の思いや考えを表現する児童の育成—言語活動の工夫を通して—」を研究主題として掲げ実践を積んできた。

本来であれば、昨年度も上記主題のもとでの研究2年目となるはずだった。しかし、想定を遙かに超えるコロナ禍の影響により、研究の継続が困難になった。

そのさなか、市内の小学校の統廃合の関係で、本年度の印教研提案校を引き受けることになった。しかも、現在の状況で最も研究実践が厳しい「話すこと・聞くこと」という領域での指定である。

そこで、今回の提案は一昨年度の研究の継続にはこだわらず、しかも、校内国語研究部員の実践のみを対象として、国語科の教科研究を積んできた。言わば、校内自主ゼミに近い形で進めてきている。領域も「話すこと・聞くこと」に焦点化したので、ほぼ「0ベース」での研究着手となった。

2 本年度の研究主題について

話し手と聞き手のやりとりを通して協働が実現するような国語科授業の創造
～想像できる話し手と積極的な聞き手を育む～

(1) 本研究でめざす“協働”ということについて

“協働”の定義

ここでは、協働を次のように定義する。

「立場の異なる自立（独立）した他者同士が力を合わせ、新たなものを生み出そうとする営み」
定義にある「新たなもの」とは、話し手と聞き手のやりとりの結果できあがった作品と捉えてもよいし、やりとりを通して生まれた、これまでにない気づきや考えと捉えてもよいと考えている。

(2) 「想像できる話し手」と「積極的な聞き手」ということについて

① 「想像できる話し手」について・・・話し手として想像できてほしいこと

本研究で「話し手に想像できてほしいこと」は、『相手（聞き手）の状況・情報』はいうまでも無い。そのほかに以下のことを本校としては考えている。

○相手（聞き手）

聞き手の状況。聞き手がすでに持っているだろう情報。

○わかりやすさ

自分の話そうとしていること（話していること）が相手にとってわかりやすくなっているかどうか。

○興味

・話すことを考えている中で、相手の興味がどこにあるか

・話しながら、相手の様子を見て（感じて）自分の話（自分の話のどこに）興味を持ったかどうか。

○反論・反応

・話す前に相手からされるだろう反論、もしくは反応。

・話しながら、相手の様子を見て（感じて）、反論されそうかどうか・自分の内容や考えに肯定的か否定的な雰囲気か。

②「積極的な聞き手」について

本研究で言うところの「積極的な聞き手」とは、以下のような聞き手をさす。

○話し手の考えに共感する部分を見出し表現できる聞き手

○話し手が自らの考えを深めたり再考したりする行為を促すような指摘や反応ができる聞き手

○話し手の中にそれまでなかった新たな考えや気づきを生み出さかけとなる反応や働きかけができる（表現できる）聞き手

3 本研究を通してつけていきたい言葉の力

本校児童の学力面での特徴、生活行動面の傾向、そして学習指導要領から読み取れる、この先求められる力を総合的に勘案した力を以下に示す。本研究を通して子どもたちにつけていきたい言葉の力を一言で表すと『情報と情報とのつながりや関係を、適切な言葉で表しながら説明する表現力』であり、『説明・表現の洗練（改善）につながるような反応を言葉にできる力』である。

この言葉の力を、「想像できる話し手」と「積極的な聞き手」との協働を実現させていく中でつけていく。

4 どのような言語活動を通してめざす姿とつけたい言葉の力に迫っていくか

ここで述べるのは、めざすものに迫っていくための手立てのことである。

本年度は、次の6つの手立てを単元の学習活動の中に組み入れながら実践を積み重ねてきた。ただし、一つの授業実践の中に全てが盛り込まれていると言うことではない。

【手立て1】

『他者に伝える』というゴールを設定した単元の学習にする。

【手立て2】

その学年にとって興味をわく方法での「話す・聞く」の言語活動をさせる。

【手立て3】

いったん書き上げた文章（既存の文章）を伝えるための読み原稿へ書き換えさせる。（既存の文章を他者に効果的に伝えるための要素を加えたシナリオへとリメイクする）

【手立て4】

明確かつ独立させた別々の視点で、他者のパフォーマンスを受け取り、自分の視点から他者のパフォーマンスをよりよくするための情報を表現させる。

【手立て5】

話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと等、全ての言語活動が必要となる単元全体の学習活動とする。

【手立て6】

主体的な学びにしていくために、次を見据えた振り返りを積み重ねていかせる。（次の時間は何をすべきか・何をしたいのか・どのようにになりたいのか等を問うて、各自が主体的な状態にあるのかをどうかを推し量り、細かな手立てを打っていく。）

1 単元名 わくわく♪宝探しをしよう！

2 単元について

(1) 単元観および系統

本単元は、話し手と聞き手が互いにヒントを出したり、質問をしたりしながら、教室に隠された宝物を見つけるという学習である。ここでは以下に示す力を身につけさせていこうと考えている。

- ①相手が聞き取りやすいように、相手の方を見てはっきりとした声で話す力
[第1学年及び第2学年の内容 知識及び技能(1)言葉の特徴や使い方に関する事項イ]
- ②相手の様子や状況を見ながら、適切な言葉を選んで話す力
[第1学年及び第2学年の内容 思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くことウ]
- ③相手の話に興味をもち、自分が知りたいことを落とさないように聞いたり、聞きたいことを明確にして質問したりする力
[第1学年及び第2学年の内容 思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くことエ]
- ④宝物を見つけるために、友達と協力して学習を進め、互いのよいところや頑張っているところを認め合える力
[特別支援学校学習指導要領自立活動編 3 人間関係の形成(1)他者とのかかわりの基礎に関すること]
- ⑤相手の話を受け止め、自分が考えたことを伝えたり質問したりする力
[特別支援学校学習指導要領自立活動編 6 コミュニケーション(2)言語の受容と表出に関すること]

上記からわかるように、本単元は国語科「話すこと・聞くこと」と特別支援教育における自立活動との関連を図る単元である。次に、本単元に関する児童の学習履歴を示す。

児童はこれまで、国語科「話すこと・聞くこと」の学習や自立活動を通して、話すときに大切なこととして「相手に聞こえる声で話す」「ゆっくり話す」「一つずつ話す」、聞くときに大切なこととして「話している人を見る」「最後まで聞く」等を学習してきた。これらの内容は、人前で発表する時や日直で司会をする時等日常生活の中でも生かしている。

一方、自立活動の中では簡単なルールのある遊びを取り入れ、他者とのやり取りの方法や気持ちの伝え方を学習してきた。また、相手の気持ちを考えることが難しい児童もいることから、相手の表情から気持ちを推測する学習を経験した。

2学期には、「大事なことを聞き取ろう一名探偵になろう」では、「迷子を探すために、アナウンスの文章を書き、聞き取りやすい声の大きさや速さで話すこと」や、「迷子の特徴を聞き落とさないように、相手に注意を向けて最後まで聞くこと」を学習した。「迷子を見つける」という共通の目標をもつことで、話し手と聞き手が協力して学習を進めることができた。

本単元では、こうした学習履歴を生かし、話し手と聞き手が互いにヒントを出したり、質問をしたりしながら、教室に隠された宝物を見つける言語活動を試みる。まず、宝物を隠す役(話し手)は、宝物を探す役(聞き手)に「○階にあります。」「○○する教室です。」といったヒントを出し、どこの教室に宝物が隠されているか考えさせる。最初のヒントだけでは宝物を見つけられないため、後は実際に教室に行き、聞き手が質問をしなければならぬ。児童の意欲を引き出すために、すぐに宝物のありかがわかる質問ではなく、「はい」か「いいえ」で答えられる質問とする。具体的には、「教室の前(後ろ)の方にありますか?」「宝物の近くには、○○がありますか?」などを想定している。

宝物を隠す役(話し手)は、宝を探す役(聞き手)の様子や状況を見ながら、質問に答えたり必要があれば追加でヒントを与えたりしてもよい。例えば、宝物がどこにありそうか、教室を見まわしている時には「○○さんは、△△に宝物がありそうだと思いますかもしれませんが、ちがいます。(おいしいです、近いですなど)」、宝物が見つからず困っていたら、「大丈夫?」「困っていない?」「ヒント出そうか?」のような言葉をかける。事前に宝を探す役(聞き手)の様子に応じて、かける言葉を想定しリストにしておく。実際に宝探しをする際は、リストからどの言葉が適切かを考えて話す。自立活動の関

連から、本単元の学習だけでなく、簡単なルールのある遊びをする時や日常生活の中でも、相手の様子からどのような言葉かけが望ましいか考えるようにしていきたい。

宝探しのポイントは、以下の3つである。

- ①相手の表情やしぐさから、どのような言葉が適切かを考えて話す。
- ②積極的に質問することで、自分が知りたい情報を得る。
- ③「宝物を見つける」という共通の目標で、話し手と聞き手が協働で学習を進めることで、人間関係を築いたりコミュニケーションを取ったりする際の基盤を養っていく。

上記の3点を授業者が自覚しながら指導を展開していくことで、本校がめざす「想像する話し手と積極的な聞き手」の姿を現実のものとしたい。

(2) 児童の実態(男子3名、女子1名)

以下の点について実態の把握に努めた。

ア つけたい力に関する実態

イ 単元で展開する言語活動の準備状態に関する実態

上記アに関して言えば、児童は話すことは好きだが、積極的に話すのは自分の興味がある内容がほとんどである。人前で話す様子から考えると、高学年の児童は、はっきりとした話し方で話すことができるが、低学年の児童は、文末が聞き取りづらかかったり、恥ずかしさから声が小さくなってしまったりする。どの児童も相手の反応を見ながら話すことは難しく、一方的に話すことが多い。また、相手が聞き取りやすい話し方として「相手の方を見て話す」「ゆっくり話す」「大きな声で話す」などは理解しているが、実際に話をする時に意識することは難しい。話し始める前に、ポイントを確認することで意識して話せる児童もいるので、活動の前にポイントを確認、自分自身で頑張りたいことを決めるのが良いと考える。

聞くことについては、話の内容に興味をもつと、質問したり相槌を打ったりしながら聞くことができる。聞く時に大切なこととして「最後まで聞く」「大事なことに気を付けて聞く」などは理解しているが、自分が興味をもてない内容については集中して聞くことが困難である。そこで、必然的に聞く状況をつくるために、児童が興味をもちやすいクイズやゲーム形式の学習活動を設定すれば、苦手意識を軽減して聞くことができると考える。

一方、本単元の言語活動に対する準備状態の実態から、宝物を見つけるために、どのようなことを質問したら良いか思い浮かぶのは個人差があることがわかった。このことから、単元の導入で質問のモデルをしっかりとかまさせることが必要だろう。また、相手の様子や状況に応じた話し方、言葉かけについては、これまでの学習から想起して考えられる児童が多くいた。休み時間や他教科での授業と関連させ、相手の様子や状況に応じた話し方、言葉かけのパターンを増やせるようにしていきたい。

(3) 指導観

以上の実態を踏まえ、以下の点に留意して指導にあたる。

- 教師2人が、宝物を隠す役(話し手)と宝物を探す役(聞き手)になって、実際に宝探しをしている映像を観て、話し方や質問の仕方のモデルをつかめるようにする。
- 事前に、宝を探す役(聞き手)の様子に応じて、宝物を隠す役(話し手)がかける言葉を想定しリストにしておく。宝探しをする時は、このリストを手元に置き、必要に応じてリストから適切な言葉を選んで話す。
- 始めに出すヒントは、「○階にあります。」「○○する教室です。」等、どこの教室かがわかる質問だけにし、後は宝物を隠す役(話し手)と宝物を探す役(聞き手)がやり取りをしながら宝物を見つける設定にすることで、話し手と聞き手の協働を実現させる。
- 宝物を隠す役(話し手)は、宝物を探す役(聞き手)が5回までの質問の中で宝物を見つけることができるように、相手が見つけられそうな場所はどこか想像して宝物を隠したり、質問に回答したりするように助言する。
- 自立活動の関連から、本単元の学習だけでなく、簡単なルールのある遊びをする時や日常生活の中でも、相手の様子からどのような言葉かけが望ましいか考えるようにしていく。

3. 単元の見出し

- 相手が聞き取りやすいように、はっきりとした声で質問したり、応答したりすることができる。
[知識及び技能(1)言葉の特徴や使い方に関する事項イ]
- 相手の様子や状況を見て、適切な言葉を考えて話すことができる。
[思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くことウ]
- 宝物を見つけるために自分が知りたいことを考えて質問をしたり、相手からの応答を聞いたりすることができる。
[思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くことエ]
- どのような言葉が相手の様子に応じているか、どのように質問したら宝物を見つけることができるかを考えながら、次の学習に必要なことを考えながら学ぼうとする。[主体的に学習に取り組む態度]

4. 指導計画(8時間扱い)

学習過程	次	時配	学習活動	評価規準
見出す	第1次	1	○教師2人が、宝物を隠す役(話し手)と宝物を探す役(聞き手)になって、実際に宝探しをしている映像を観る。 ○映像から、話し方や質問の仕方をつかむ。	・宝探しのモデル映像を観て、話し方や質問の仕方をつかみ、理解している。 [思判表 話聞]
		1	○教室で宝探しをし、前時で学習した話し方や質問の仕方を、より明確につかむ。	・実際に宝探しをすることで、話し方や質問の仕方を、より明確に理解している。 [思判表 話聞] ・単元の学習内容を知り、自分のめあてを明確にしている。 [主]
自分で取り組む	第2次	1	○宝物を隠す教室を知り、宝物を隠す場所と始めに出すヒントを考える。 (ヒントの例) 「宝物は、○階の教室にあります。」 「宝物は、○○をする教室にあります。」 「さあ、どこの教室でしょう。」	・相手が、質問だけで宝物を見つけられる場所はどこか想像しながら、隠す場所やヒントを考えている。 [主]
		1	○宝探しをする時に想定される聞き手の様子を考え、どのような言葉をかけたらいかが考える。 (例) ・教室を見まわしている時 「○○さんは、△△に宝物がありそうだと思います。もしかかもしれませんが、ちがいます。(おいしいです、近いですなど)」 ・宝物が見つからず困っている時 「大丈夫?」「困っていない?」「ヒント出そうか?」 ・宝物が見つかった時 「やったね!」「頑張ったね!」「宝物が見つかって嬉しいね!」	・宝探しをする時に想定される聞き手の様子から、どのような言葉が適切か考えている。 [思判表 話聞]

広げ深める	第3次	2 (本時2/2)	<p>※同じ活動を2時間行う。</p> <p>○指定されたペアで宝探しをする。</p> <p>○学級全員での宝探しに向けて、自分の話し方や聞き方を振り返り、より良い話し方や聞き方にするために必要なことを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が聞き取りやすい話し方で質問したり応答したりしている。 [知技] ・宝物を見つけるために自分が知りたいことを考えて質問をしたり、相手の応答を聞いたりしている。 [思判表 話聞] ・相手の様子や状況を見て、適切な言葉を考えて話している。 [思判表 話聞] ・自分の話し方や聞き方を振り返り、より良い話し方や聞き方にするために必要なことを考えている。 [主]
まとめあげる	第4次	2	<p>※同じ活動を2時間行う。</p> <p>○宝物を隠す場所や教室、ペアを変えて宝探しをする。</p> <p>○学習を通して、話し方・聞き方について自分の成長を友達の頑張りを振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・相手が聞き取りやすい話し方で質問したり応答したりしている。 [知技] ・宝物を見つけるために自分が知りたいことを考えて質問をしたり、相手の応答を聞いたりしている。 [思判表 話聞] ・相手の様子や状況を見て、適切な言葉を考えて話している。 [思判表 話聞] ・質問や応答など、互いの言葉に耳を傾け、協力して宝探しをしている。 [主]

5. 本時の指導 (6/8)

(1) 目標

- ・相手が聞き取りやすい話し方で質問したり応答したりすることができる。 [知技]
- ・宝物を見つけるために自分が知りたいことを考えて質問をしたり、相手からの応答を聞いたりすることができる。 [思判表 話聞]
- ・相手の様子や状況を見て、適切な言葉を考えて話すことができる。 [思判表 話聞]
- ・自分の話し方や聞き方を振り返り、より良い話し方や聞き方にするために必要なことを考えている。 [主]

(2) 展開

時配	学習内容と学習活動	○指導と支援 ※評価	資料
5	1 前時の学習を振り返り、本時の学習内容とめあてを確認する。	○本時の学習内容を児童と一緒に確認し、見通しをもって学習に取り組めるようにする。	単元マップ
35	2 音楽室で宝探しをする。 (1) 宝探しのルールを確かめる。 ○ルール ・協力して宝物を見つける。 ・宝を探す時は、教室にある備品には触れない。 ・質問は5回までとする。 ・宝物を隠す役(話し手)は、「その質問にはお答えできません」というジョーカーを一度だけ使える。	○宝探しのルールを掲示しておくことで、必要な時に児童自身で確かめられるようにする。	宝探しのルール 想定される様子や状況に応じた言葉かけをまとめたリスト

	<p>(2) ペアで宝探しをする。</p> <p>⑤ この教室のどこかに宝物が隠されています。一分間、教室を見渡して、宝物がありそうな場所を考えてください。</p> <p>⑥ ううん、棚の中かなあ。カーテンの後ろも怪しいなあ。</p> <p>⑤ ○○さんは、カーテンの後ろに宝物があると思っているかもしれませんが、全然違います！</p> <p>⑥ 全然違うの？じゃあ、どこにあるのだろう？</p> <p>⑤ では、質問をどうぞ。質問は5回までです。</p> <p>⑥ 宝物は、教室の前の方にありますか。</p> <p>⑤ はい。教室の前の方にあります。</p> <p>⑥ 宝物は、掃除ロッカーの中にありますか。</p> <p>⑤ いいえ。ありません。</p> <p>⑥ では、宝物の近くにラジカセはありますか。</p> <p>⑤ いいえ。ありません。</p> <p>⑥ 全然、見つからないよ。困ったなあ。</p> <p>⑤ 大丈夫？ヒントはありますか？</p> <p>⑥ はい。お願いします。</p> <p>⑤ 宝物は、ある楽器の近くにいます。</p> <p>⑥ あ！宝物は、ピアノの近くにいますか？</p> <p>⑤ それには、お答えできません。</p> <p>⑥ ピアノのカバーの中を見てもいいですか。</p> <p>⑤ はい。どうぞ！</p> <p>⑥ やったあ！宝物があった！</p> <p>⑤ 宝物が見つかってよかったね！</p>	<p>○宝物を隠す役(話し手)が宝物を探す役(聞き手)の様子や状況に応じて話すことをリストにして手元に置き、必要に応じてリストを見ながら適切な言葉を選ぶように助言する。</p> <p>○宝物を見つけられた時に悔しさを表す児童がいることが予想されるので、そのような時は、話し方の良かった点や協力して宝探しができたことを伝え、称賛する。</p> <p>○なかなか質問ができない児童には、個別に声をかけ、宝物がどこにありそうか予想ができていないか尋ねる。できていたら、質問するように促す。できていなければ一緒に考える。</p> <p>※宝物を見つけるために自分が知りたいことを考えて質問をしたり、相手からの応答を聞いたりすることができたか。 [思判表 話聞] (宝探しの態度)</p> <p>※相手の様子や状況を見て、適切な言葉を考えて話すことができたか。 [思判表 話聞] (宝探しの態度)</p>	
5	<p>3 本時の学習を振り返り、学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宝物がなかなか見つからなかった時、「困っていない？」と声をかけることができた。 ・相手が聞き取りやすいように、はっきりと質問できた。 ・協力して宝物を見つけることができた。 ・次は、質問に答えてもらった時、うなづいて反応するようにしたい。 ・相手の様子を見て、言葉かけを考えられるように頑張りたい。 	<p>○自己評価カードで本時の自分の活動を振り返り、「話すこと・聞くこと」についてよくできたことや、次時に頑張りたいことに気付けるようにする。</p> <p>※自分の話し方や聞き方を振り返り、より良い話し方や聞き方にするために必要なことを考えているか。[主] (自己評価カード)</p>	自己評価カード

本時の場の配置（板書計画に代えて）

（本時は、音楽室で行う）
☆事前に、宝物は隠しておく。

ホワイトボード
めあてや宝探しのルール
等を掲示する。

ペア 1

2年男児A（聞）

6年女児C（話）

ペア 2

6年男児B（話）

6年男児D（聞）

[資料 実態調査の項目]

1) つけたい力に関する実態

- ①相手が聞き取りやすいように、相手の方を見てはっきりとした声で話することができるか。
- ア 自分で意識して、相手の方を見てはっきりとした声で話している。
 - イ 周囲からの働きかけを受けて、相手の方を見てはっきりとした声で話している。
 - ウ 相手の方を見ているが、最後まではっきりとした声で話すことが難しい。
- ②相手の様子や状況を見ながら、適切な言葉を選んで話することができるか。
- ア 相手の様子や状況を見ながら、適切な言葉を選んで話することができる。
 - イ 相手の様子や状況を見ながら、適切な言葉を選んで話すことが難しい。
- ③どのような場であれば、相手の話に興味をもち、自分が知りたいことを落とさないように聞いたり、聞きたいことを明確にして質問したりできるか。
- ア 相手も自分も興味がある内容の時
 - イ 聞き取りワークやクイズをする時
 - ウ 集会の話や連絡事項を聞く時
- ④相手に伝わる話し方や大事なことを落とさない聞き方について理解しているか。
- ア 相手に伝わる話し方で大切なこと
 - ・相手に体と視線を向けて話す。
 - ・ゆっくり話す。
 - ・大きな声で話す。
 - ・相手が自分の話を理解しているか確かめて話す。
 - イ 大事なことを落とさない聞き方で大切なこと
 - ・静かに最後まで聞く。
 - ・相手に体と視線を向けて話す。
 - ・大事なことに気を付けて聞く。
- ⑤④の内容を実践できているか。
- ア 自分自身で意識して実践できている。
 - イ 周囲からの働きかけがあれば、実践できている。
 - ウ 周囲からの働きかけがあっても難しい。

2) 表現する内容の準備状態に関する実態

- ①宝物を見つけるために、どのようなことを質問したら良いか。(教室で宝探しを試行した)
- ア 質問したいことを相手に聞くことができる。
 - イ 質問したいことは思い浮かんでいるが、何と言ってよいのかわからない。
 - ウ 質問したいことが思い浮かばない。
- ②相手の様子や状況に応じて、どのような話し方や言葉かけができるか。
- ア 相手が困っている時
 - ・大丈夫? ・何か教えてほしいことはある? ・一緒にやろうか?
 - イ もう少しで宝物が見つかりそうな時
 - ・もう少しだよ! ・頑張って! ・あ! 惜しい!
 - ウ 宝物を見つけた時
 - ・やったね! ・よかったね! ・頑張ったね!

視点1 想像できる話し手

○相手の様子や状況に応じた言葉かけ ～「こんな時どうする!？」言葉かけリストの作成～

(1)「表情や言動」と「気持ち」を結びつける

まず、導入で活用したモデル映像から、

- ①宝物が見つからず困っている時
- ②もう少しで、宝物が見つかりそうな時
- ③宝物を見つけて喜んでいる時

の3つの場面を提示した。それぞれの場面について、「相手のどのような表情や言動に、気持ちが表れているか。」を考えた。相手の表情や言動を注意深く見ることは、相手の気持ちを考える上で大切なことである。自立活動の学習との関連を図り、本学級の児童にとって共通の目標である「相手の気持ちを考える力」をつけるために、この活動を取り入れた。児童は、モデル映像を観て気付いたことやこれまでの経験から、気持ちが表れている表情や言動を考えることができた。



【宝物が見つからず困っている時】

- ・頭を抱えている。
- ・首をかしげる。
- ・顔をしかめたり、不安そうな顔をしたりする。
- ・「どうしよう…。」「困ったなあ。」「ううん、わからない…」



【宝物を見つけて喜んでいる時】

- ・ガッツポーズ、ばんざいをしている。
- ・嬉しくてジャンプする。
- ・「あつた!」「やったあ!」「イエーイ!」
- ・「よっしゃあ!」「ここにあつた!」「わあい!」

(2)それぞれの場面について、望ましい言葉かけを考える

次に、それぞれの場面について、どのような言葉かけが望ましいかを考え「言葉かけリスト」に記入していった。児童から出た主な考えは、以下の通りである。

【①宝物が見つからず困っている時】

- ・大丈夫? ・今、困っている?
- ・ヒントを出そうか?

【②もう少しで、宝物が見つかりそうな時】

- ・近いよ!もう少し!
- ・頑張れ!いいぞ!

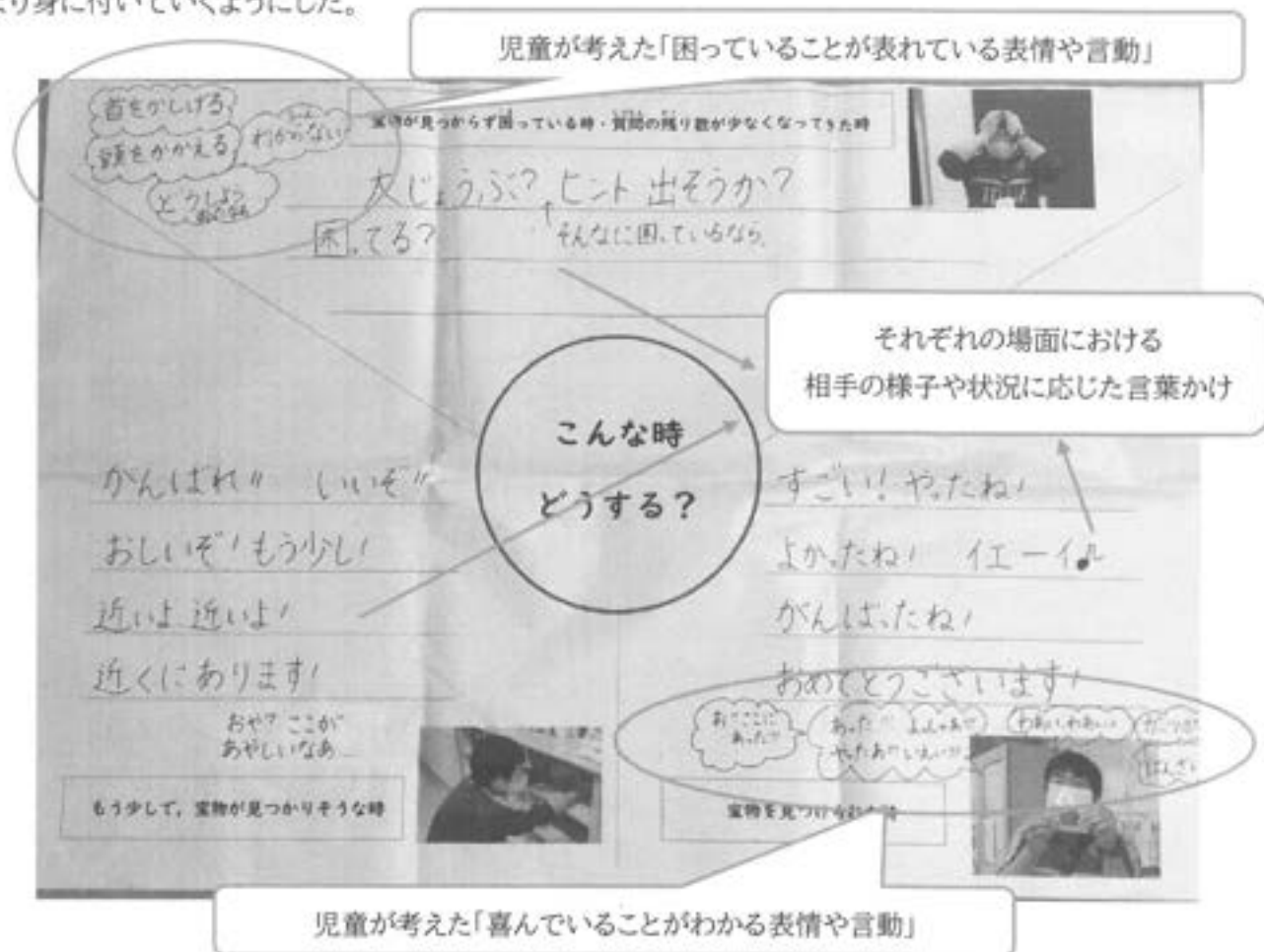
【③宝物を見つけて喜んでいる時】

- ・すごい!やったね! ・よかったね!
- ・おめでとう!



【児童の発表をまとめたもの】

黒板に掲示をして、いつでも見られるようにした。また、自立活動の時間や日常生活の中でも活用し、学習したことがより身に付いていくようにした。



【実際の宝探しの場面】

実際に宝探しをおこなう時は、「言葉かけリスト」を持ち、参照して良いことにしていたが、児童は「言葉かけリスト」を見なくても、相手の様子や状況を注意深く見て、言葉をかけることができた。



視点2 積極的な聞き手

○宝物を見つけるための情報収集～話し手とのやり取りを通して～

「話し手」から始めに与えられるヒントは、「どこにある教室か。」「何をする教室か。」の2点だけである。これらのヒントだけでは、宝物を見つけることはできない。宝物を見つけるために必要な情報は、「聞き手」が積極的に質問をして集めるという設定とした。導入で、モデル映像を観たり、教師が「聞き手」、児童が「話し手」となって宝探しの体験をしたりすることで、質問の仕方をつかめるようにした。何度か宝探しを体験するうちに、児童は質問の仕方を理解することができた。

質問のポイントは、以下の3つである。

- ①「はい」か「いいえ」で答えられる質問
- ②広い範囲から、だんだん宝物に近付いていくような質問
- ③質問は5回まで

「①『はい』か『いいえ』で答えられる質問」とは、「聞き手」がある程度宝物のありかを予想して「宝物は、教室の前の方にありますか。」「宝物は、本棚の近くにありますか。」のような質問のことである。「宝物は、教室のどの辺りにありますか。」や「宝物の近くには、何がありますか。」という「はい」か「いいえ」で答えられない質問の場合、すぐに宝物に近付いてしまうと考えた。「はい」か「いいえ」で答えられる質問にすることで、「聞き手」がより積極的に質問して情報を集められるように工夫した。

「②広い範囲から、だんだん宝物に近付いていくような質問」については、「広い範囲の質問」とは、「教室の前の方にありますか。」「宝物は、教室のグラウンド側にありますか。」という質問を指し、「だんだん宝物に近付くような質問」とは、「宝物の近くに、〇〇はありますか。」「宝物は、このロッカーの中にありますか。」という核心的な質問を指す。

「③質問は5回まで」とすることで、「聞き手」は、思いついたことを無制限にどんどん質問するのではなく、宝物を見つけるために自分が知りたいことをよく考えて質問するようなしなかにした。また、「話し手」も質問の残り回数を意識したり、「聞き手」が質問の残り回数が少なくなってきた困っている様子を見取ったりしながら、宝物が見つかるように「聞き手」を導いていけるようにした。

なお、①②については、児童がモデル映像や宝探しの本番前の体験から気付くことができた。③については、教師が提示した。

【実際の宝探しの場面(場所:教室)～「話し手」と「聞き手」のやり取り～】

※教室は、壁で半分に仕切られているつくりになっている。
2人のやり取りは、教室②でおこなわれている。



場面	「聞き手」(2年男児)	「話し手」(6年男児)
	①宝物は、教室を半分にして、こっち側(廊下側)にありますか。	いいえ、ありません。

	<p>②教室を前から見て、こっち側(後ろ側)にありますか。</p>	<p>ううん、難しいなあ。 今いる場所から見ると、確かにこっち側(後ろ側)にあるけど…</p>
		<p>(教室①にあるから) いいえ、違います。 隣の部屋に戻ってもいいよ。</p>
	<p>③(教室後ろのロッカーを示しながら)ここの棚のどれかにありますか。</p>	<p>いいえ、ないけれど近いです。</p>
	<p>(教室の中を見ながら、宝物のありかを考えている。)</p> <p>あごに手を当てる身振りをし、「ううん…」と言うことで、「話し手」に「わからない」という気持ちが伝わっている。</p>	<p>わからないですか？ それでは、ヒントを出します。 (追加のヒント) 僕たちの、いつもやる行動を示してくれるものの近くに 있습니다。次の授業が何かわかるものだよ。</p>
	<p>④(日課用のホワイトボードを指しながら)じゃあ、この後ろにありますか。</p>	<p>ううん、それにはお答えできません！(これは、ジョーカーとして、宝物が見つかりそうな時に、一度だけ使って良い言葉)</p>
	<p>ホワイトボードを寄せて、後ろを見てもいいですか。</p>	<p>いいですよ。どうぞ！</p>
	<p>あった！イエーイ！</p> <p>手を挙げる動作、笑顔によって「嬉しい」という気持ちが伝わっている。</p>	<p>やったね！</p>

広い範囲の質問から、だんだん宝物に近づいていくように質問している。

指導を振り返って

(1)視点1「想像できる話し手」に迫れたか

～相手の様子や状況に応じた言葉かけが「想像できる話し手」の実現に功を奏したか～

本単元では、視点1の実現のために、【手立て2】を受けて『「こんな時どうする!?」言葉かけリストの作成』を通して、聞き手の表情や言動に応じた言葉かけを考える活動を試みた。本学級の児童は、相手の表情を見て気持ちを考えたり、他者の立場に立って物事を考えたりすることが苦手な児童が多い。このことから、「相手の様子や状況に応じた言葉かけ」を考えることは、コミュニケーションの基礎となる力をつけることにもつながると考えた。

「言葉かけリスト」の作成にあたり、「表情や言動」と「気持ち」を結びつけることが必要であると考え、導入で活用したモデル映像から、3つの場面を取り上げ、相手のどのような表情や言動に、気持ちが表れているかを考えた。

その結果、実際の宝探しの場面では、相手が頭を抱えて「ううん…」と言っている姿を見て、「大丈夫？ ヒントを出しますか？」と言葉をかける姿、宝物を見つけて「やったあ！ありがとうございます！」と言った友達に対して、拍手をしながら「おめでとう！」と共に喜ぶ姿が見られた。また、高学年の児童は、質問の残り回数を指で示しながら、「質問は、あと〇回だよ。ヒントを出しましょうか？」と、状況を的確に把握して聞き手に言葉をかけていた。

また、6年男児が「話し手」としてヒントを出した時に、「聞き手(2年男児)」が「わからない。」と言って首をかしげた場面があった。その様子を見て、6年男児は、「今の自分のヒントの出し方では伝わらないから、別の言い方をしよう。」と、ヒントを言い換えていた。学習の後に、なぜヒントを言い換えたのか尋ねると、「首をかしげていたし、『わからない。』と言ったのを聞いて、言い方がよくなかったと思った。」と答えていた。これまで、6年男児は自分の話したことが伝わらないと、「え？こんなのもわからないの？」と言うことがあったが、相手の反応から自分の言い方を振り返り、改められるようになった。

相手の様子をよく見て、その場に合った言葉をかけたり、自分のヒントの出し方を改めたりする姿から、この手立ては有効であったと考える。

(2)視点2「積極的な聞き手」に迫れたか

～宝物を見つけるための情報収集が「積極的な聞き手」の実現に功を奏したか～

本単元では、視点2の実現のために、【手立て2】を受けて『「聞き手」が「話し手」とのやり取りを通して、宝物を見つけるために必要な情報を集める』という活動を試みた。質問ができる回数は5回までとし、「聞き手」は、思いついたことを無制限にどんどん質問するのではなく、宝物を見つけるために自分が知りたいことをよく考えて質問するようなしかけにした。

その結果、実際の宝探しの場面では、「宝物は、教室を半分にして、廊下側にありますか。」「ミシンがある場所を中心とすると、(家庭科室の前方を指しながら)こちら側にありますか。」という広い範囲の質問から、「話し手」の応答を受けて、「宝物はこのロッカーのどれかにありますか。」「棚の中にありますか。」などと、少しずつ宝物に近づくように質問をして情報を集めることができた。また、なかなか宝物にたどり着かない場面でも、「話し手」とやり取りを続けることができた。このことから、この手立ては有効であったと考える。2年男児は、考えをもっている、表現の仕方がわからず話すことができなかつたり、友達とのかかわりの中で積極的に話すことが少なかつたりした。しかし、本単元では「聞き手」として、「宝物を見つけたい！」という思いをもって、自分が知りたい情報を考えて積極的に質問することができた。単元の導入で、質問のモデルをしっかりつかんでいたこと、6年生が上手に助言をしていたことも、2年男児の変容につながったと考える。

また、質問ができる回数に制限があることで、「話し手」が質問の残り回数を示しながら、「質問はあと〇回です。ヒントはいりますか？」と声をかける姿が見られた。これは、状況をしっかりと把握して、宝物を見つけられるように「聞き手」を導いていると考えられる。このことから、この手立ては「話し手」にとっても有効であったと考える。

(3)協働が実現できたか

児童の実態から、「話し手」と「聞き手」が互いに興味をもてる活動を設定することが、協働の実現につながると考えた。そこで、児童がよく知っている宝探しのルールをアレンジし、「話し手」と「聞き手」が協力して宝物を見つけること」をめあてとした。「宝物を見つける」という共通の目標をもつことで、互いに相手に注目して話したり聞いたりすることができるのではないかと考えた。

児童は、「協力して宝物を見つける」というめあてを意識し、「話し手」と「聞き手」のやり取りを大切にして活動していた。具体的には、「話し手」は、「聞き手」の表情や言動から気持ちを読み取り、その場に合った言葉をかけることができた。また、質問は5回までというルールだったため、「質問は、あと2回だよ。」と声をかけたり、指を折って質問の残り回数を示したりして、限られた質問回数の中で、宝物にたどり着けるように「聞き手」を導く姿も見られた。「聞き手」は、「話し手」の応答をよく聞いて、情報を集めていた。なかなか宝物にたどり着かない場面は、「ううん、難しいなあ。」と言いながらも、怒ったり、途中で諦めたりすることはなく、最後まで活動することができた。

本学級の児童は、他者と共に行動したり、相手の話に耳を傾けて受け入れたりすることが難しい場面がある。本単元の学習を通して、質問に対する応答をしっかりと聞く姿、「違います。」と言われても怒ったり、投げ出したりせずに学習を続けられた姿、「話し手」と「聞き手」がやり取りをしながら宝物にたどり着く姿が生まれた。また、特にこだわりが強く、他者に合わせて行動することが苦手な児童が、友達と協力して学習に参加できたことは、大きな変容だった。宝探しのやり取りの中で、6年男児の世界観を感じる場面があった時、ペアの児童も周囲で見ている児童も、その世界観を否定することなく、穏やかに受け入れながら活動することができた。これらのことから、協働が実現できたと考える。

(4)子どもたちの姿からどんな言葉の力がついたか

学習指導案上でも述べたように本実践でつきたい力は5つあった。国語科の学習としてつきたい力が3つ、特別支援教育の自立活動の学習としてつきたい力が2つの計5つである。

- ①相手の方を見て、相手が聞き取れるようにはっきりとした声で話す力については、低学年の児童は、緊張が強い場面では、はっきりとした声で話すことが難しかった。高学年の児童は、相手と目線を合わせるようにしゃがんで話したり、目と目を合わせて話したりしようとしていた。話し方や声の大きさも聞き取りやすく、この力がついたと考える。
- ②「話し手」は、「聞き手」が頭を抱えている様子や首をかしげている様子を見て、「わからない」「困った」などの感情を読み取り、「大丈夫?」「ヒントはありますか?」とその場に合った適切な言葉をかけることができた。「話し手」が、相手の様子や状況に合った適切な言葉をかけるためには、「聞き手」の反応が大切であると考えた。しかし、始めは「聞き手」が「話し手」に対して背中を向けながら話すことが多く、表情や言動が見えづらかった。単元の途中で、パワーアップポイントとして「顔と顔を合わせよう」「身振り手振りをつけてみよう」の2点を示したことで、互いに顔を合わせて話したり、少しずつ身振り手振りが見られたりするようになった。モデル映像を提示する段階で、「聞き手」の反応について取り上げていたら、児童から反応の仕方について様々な意見が出たのではないかと考える。
- ③相手の話に興味をもって聞いたり、聞きたいことを明確にして積極的に質問したりする力については、思いついたことをどんどん質問するのではなく、宝物がありそうな場所をある程度予測し、聞きたいことを明確にして質問することができた。途切れることなく、「話し手」と「聞き手」がやり取りを続けられたことから、互いに興味をもって話を聞いたり、話したりしていたと考える。
- ④宝探しのルールを工夫したことで、児童は相手の様子をよく見たり、互いに質問の回数を意識してやり取りをしたりしていた。宝物を見つけられるまで共に学習を続けられたことから、友達と協力して学習を進める力がついたと考える。宝物を見つけられた時、「頑張ったね!」「恥ずかしがらないで話すことができていたね!」と声をかけ合う姿が見られた。振り返りの段階で、宝探しをしている場面をビデオで観ながら、互いの話し方・聞き方を振

り返り、フィードバックし合う活動を取り入れたら、もっと互いのよいところや頑張っているところを具体的に伝え合い、認め合えることができたのではないかと考える。

- ⑤相手の話を受け止め、自分が考えたことを伝えたり質問したりする力に関しては、「聞き手」が質問したことに対して、「違います。」という答えが続いた場面でも、怒らずに次の質問を考えてやり取りを続けた姿があった。これは、「話し手」の応答を受け止めている姿と考えられる。しかし、この姿は、本単元の中だけでなく、日常生活につながってこそ身についた力と言えるのではないかと考える。日常生活につながっていくような手立てと支援が必要である。

- 1 単元名 スペシャルな読み聞かせをしてもらおう！
～鬼が出てくるお話をします・聞きます・選びます～（共通学習材「おにたのぼうし」）

2 単元について

(1) 単元観及び系統

本単元では、「おにたのぼうし」を共通学習材として学びながら、鬼を登場人物としたお話を自分たちで選び、プレゼンテーションをしていく。（以下プレゼンと略）そして、「おにたのぼうし」で学習した読みの視点でプレゼンを行い、プレゼンを聞いてもっと読みたくなったお話に投票し、スペシャルゲストに読み聞かせてもらうスペシャルな1冊を決めるという単元全体のシナリオである。ここでは、以下に示す力を身につけさせていこうと考えている。

- ① 物語を読み、登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、語彙を豊かに普通の会話や文章の中で使う力 [知識及び技能(1) 言葉の特徴や使い方 オ]
- ② 相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などについて注意して話す力 [知識及び技能(1) 言葉の特徴や使い方 イ]
- ③ 物語を紹介するために、登場人物の性格や気持ちの変化について、場面の移り変わり結び付けて想像したり、読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいたりする力 [思考力、判断力、表現力等 C 読むこと エ及びカ]
- ④ 自分が伝えたいことを意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などについて工夫する力 [思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと ウ]
- ⑤ 友達のプレゼンを聞きながら、必要なことをメモしたり、質問したりして、話し手が伝えたいことを捉え、自分の考えをもつ力 [思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと エ]

本単元では、以下に示すプレゼンに有効だと考える7つの視点で、「おにたのぼうし」の魅力を読んでいくこととする。このうち各グループ4つの視点を選び、自分たちの選んだ物語のプレゼンに使う。

- ① 主人公についての情報（登場人物①）
- ② 脇役についての情報（登場人物②）
- ③ ストーリー展開についての情報（あらすじ）
- ④ 表現・情景描写等についての情報（おもしろ言葉）
- ⑤ 重要なアイテムについての情報（登場するもの）
- ⑥ 題名についての情報（題名）
- ⑦ 登場人物同士の関係についての情報（人物相関図）

共通の学習材「おにたのぼうし」を学ぶにあたっては、「自分たちが選んだ鬼が登場する物語をプレゼンする」ということを常に意識させながら、上に挙げた7つの視点で読んでいくという学習を経験させる。上記の学びをしていくことで、物語を場面ごとに読んでいくという学びから解放され、全体を丸ごと読み深めていくことが期待できる。物語の世界に溺れてしまうことなく、プレゼンすることを常に意識しながら、メタレベルで物語を丸ごと読んでいく学習としていきたい。そして、この読み方を生かして自分のお話を読み、情報を精選したり、加工（プレゼンのための台本をつくる）したりして、プレゼンを行っていく。したがって、本単元は「読むこと」と「話すこと・聞くこと」が相互に絡んだ融合単元と言える。そこで、次に、本単元の関連する児童の学習履歴を示す。

まず、「読むこと」では、2学年で「おにのおじいさんのたからもの」「泣いた赤おに」で鬼が出てくる物語に触れ、登場人物同士の会話や叙述から、心情や気持ちの変化を読み取る活動を行ってきた。続く3学年「モチモチの木」では、豆太の性格、気持ちの変化を場面の移り変わり結び付けて読み取り、豆太やじさまの気持ちを想像しながら、物語のおもしろさや魅力を見つける学習を行ってきた。叙述や言葉に着目した読みは行ってきたものの、視点を与えての物語全体を丸ごと読

み深めていく経験は初めてに近い。

一方、「話すこと・聞くこと」では、2学年では場面に応じての声の大きさを考えたり、話すときの話し方について学んだりした。また、内容的には理由を付けて話したり、集めた情報の中からどれを話せばよいのか等、簡単な構成を考えて話したりするを経験してきた。続く3学年では、初めて司会等の役割を分担し、話し合い活動を行った。また、物語のおもしろさを伝える活動も初めてプレゼン形式で行った。

本単元では、こうした学習履歴を生かし、まず、物語を読み取り、各々の視点で感じたように物語の魅力伝えるための言葉を「お話言葉辞典」に集めていき、それを友達に紹介する表現様式（以下、台本と称す）に加工するという言語活動を試みる。その上で、台本をもとに、チームごとに物語についてプレゼンを行い、ピブリオバトル形式でスペシャルな読み聞かせを実現させていくための投票を行っていく。プレゼンは、「プレゼンをする」－「それを聞く」という一方向の活動ではなく、プレゼンを「する側」と「される側」の「対話」を盛り込んだものにし、従来の「発表－質疑応答」という形式ではなく、「する側」と「される側」の間答をプレゼンの途中途中に入れていく。つまり、物語の良さをただ羅列するだけでは、聞き手の読みたい意欲をかき立てることはできない。情報を精選し、敢えて不完全なものにしたり、話し方や構成を工夫した台本にしたりしてプレゼンを行う必要がある。従って、まずは物語全体のあらすじをつかみ、自分なりに感想や考えを「お話言葉辞典」に書き留めておく。その後、必然的に構成を考えながら情報を精査し、台本へと加工していく。プレゼンのゴールのイメージをもちながら、物語の全体を読み進めていくことで、物語に入り込みながら、自分の視点ももちつつ、多角的に物語を読み、見通しをもって学習に取り組んでいけるのではないかと考える。台本の具体例としては、「このお話には〇〇という人物が出てきます。この絵からそんな人だと思いませんか。（挿絵を見せる）なるほど…。物語の中にこんな文がありました。（引用を見せる）どうですか？（何人か意見を聞く）なるほど…。確かにそういう考えもありますね。でも実は、こんな一面もあるんです。……」という聞き手との間答を予想しながら、プレゼンを進めていくイメージである。間答を展開する中で「する側」にも、今まで気付かなかった、考えもしなかったことに直面し、新たな考えを生み出していく可能性があると考えたからである。上記が成立するのであれば、『「する側」と「される側」の協働によって、物語に対する新しい考えが生み出された』と言える状態になる。

スペシャルな1冊を決めるためのプレゼンのポイントは、以下の2者の実現である。この2者を実現させるために以下の点に留意する。

① 想像できる話し手の姿

- ア プレゼンに盛り込む情報の精選ができる
- イ どんな順番でプレゼンすると聞き手にとって効果的か、読みたいとさせられるかの構成を考慮することができる
- ウ どんな問いかけをするとわかりやすいか考えることができる
- エ 選んだ物語をプレゼンするにあたっての最適な視点の選択をすることができる
- オ 聞き手にとって聞き取りやすい話し方と資料の提示の仕方を工夫することができる
- カ 自分のお話を読んでプレゼンに生かせそうなことを集めた「お話言葉辞典」をもとに、相手の反応を想像しながら台本へと加工することができる

② 積極的な聞き手の姿

- ア 最後に読んでもらいたい鬼のお話を選ぶという、プレゼンを聞く目的を常に意識して聞くことができる
- イ プレゼンの記憶や印象で“選んでしまう”ことを避けるために、他のグループのプレゼンのたびに選択の根拠となる感想や考えなどの情報を記す「◎判断メモ」を書くことができる
- ウ プレゼンを聞きながらの独り言、つぶやきは我慢しない（声の音量には注意が必要）

以上のような聞き手の実現のために、児童の素直な反応を受容できるような雰囲気作りを目指していく。上記の2者を授業者が自覚しながら指導を展開していくことで、本校がめざす「想像する話し手と積極的な聞き手」の姿を現実のものとした。

(2) 児童の実態 (男子15名 女子17名 計32名)

以下の点について実態の把握に努めた。

ア つけたい力に関する実態

イ 単元で展開する言語活動の準備状態に関する実態

具体的な調査の結果については、本指導案の最後に資料として掲載した。以下、調査結果を総括して述べる。

上記アに関して言えば、物語において言葉に着目しながら叙述をもとに読んだり、想像を広げたりすること、自分と重ね合わせたりしながら物語を楽しんで読むことはできるが、物語から得た新しい言葉を自分のものにして生活や文章の中で使うことはできていない児童が多い。よって、得た言葉を自分のものとして使えるようになるための手立てが必要である。また、話すことにおいて、撮影形式で行っている朝の会のスピーチでは、友達のスピーチに対して質問や感想を述べたり、クイズを出したりすることに意欲的に取り組んでいる。このことから話したり聞いたりすることは、好きな児童が多いように思われる。しかし、見ていると話し手は一方向的に言いたいことを「最後まで流暢に言いきる」に近い。また、聞き手も「最後まで黙って聞き、拍手をしてから感想・質問」というように一連の作業になっているように感じる。「姿勢」や「相手を見る」等、態度面での相手意識はあるが、相手の反応等まで考えて話せていないことが伺える。つまり、「話す」というより「言う」ようなイメージである。聞くことにおいても同様、「最後まで聞く」や「話している人の方を向く」等、態度面での相手意識はあるが、「黙って聞く」「質問や感想があれば最後に言う」のように「黙って、最後まで、行儀良く聞くこと」が児童の中では最優先事項になっているように感じる。また、友達の話を聞き取ることはできていても、そこに思考が伴っていない児童が多い。思考しながら聞くことが習慣化されていない可能性がある。そこで、物語の言葉や挿絵から想像を膨らませ、プレゼンを聞きながら、友達の読みについて感想や意見を言うことで、少しでも思考しながら楽しく聞けるようにしていきたい。そして、相手とのやりとりの中で、情報を得ながら、物語のあらすじを想像したり、登場人物の性格を予想し、友達の意見にヒントを得たりしながら、新しい発見をもとに「スペシャルな1冊」を選んでいくという活動が望ましいと考える。

一方、本単元で展開する言語活動の準備状態に関する実態から、「お話言葉辞典」に物語の要素を集めていくところでは、個人差がある。物語が長くなり、意欲が継続しない、難しい言葉が増え、わからない言葉の意味をそのままにしてしまう等が要因であると考えられる。そこで、教師が児童の前で国語辞典を日常的に活用する姿を見せ、児童も国語辞典をいつでも活用できるような環境を整える。加えて、グループで読みの確認をしていくことで、物語の魅力に気づけるようにしていく。また、台本にしていくにあたり、情報を精査して、書いていくことが一人では難しい児童もいる。したがって、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいたりする観点からも「お話言葉辞典」、台本の作成時、どちらにおいても各自グループでの活動を繰り返して取り入れていく。そうすることで、人前で話すことが苦手と感じている児童や一人での発表に不安を抱えている児童が、安心して学習できるようにしたい。

(3) 指導観

以上の児童の実態を踏まえ、次のようなことに留意し児童の読む力、話す・聞く力を付けていく。

- どのような学習をしていくのか児童に見通しをもたせるために、授業者のプレゼンテーションモデルをいくつか用意し、児童が自分の挑戦したいゴールを見据えて意欲的に学習が進められるようにする。また、各自、自分の思うようにアレンジを加えても良いこととする。
- 読みの幅が広がるよう、「国語辞典」や「お話言葉辞典」を適宜活用しながら、各自一全体/グループで行うことで、自分の読みを確かなものにし、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいていけるようにする。また、「お話言葉辞典」からプレゼンに必要な情報をそれぞれの視点で精選し、台本に加工していく。
- 学校図書館司書と連携し、「鬼」という概念が固執してしまわないよう、様々な種類の絵本を用意し、自由な発想で比べながら考えられる環境を整える。
- 話し手と聞き手でお互いが問答し協働することで、新しい考えが生まれるプレゼンにしていけるようグループ内で話し手・聞き手に分かれて繰り返し練習ができる時間を確保する。また、

台本も、聞き手の反応にどう対応していくかを考えながら書いていくが、グループ内で相談しながら改良していけるようにする。

- プレゼンの記憶や印象で選んでしまうことを避けるために、聞き手は「◎判断メモ」を記入し、選択の根拠となる感想や考えなどの情報を残しておく。

3 単元の見出し

- 登場人物の性格や心情の変化を表現するための語句を増やしなが、相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話することができる。
[知識及び技能(1)言葉の特徴や使い方に関する事項イ及びオ]
- 物語を紹介するために、登場人物の性格や気持ちの変化について、場面の移り変わりや結び付けて想像したり、読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいたりすることができる。
[思考力、判断力、表現力等C読むこと(1)エ及びカ]
- 話を聞き手にわかりやすく伝えるために、聞き手の反応を想像しながら台本を考え、言葉の抑揚や強弱等について工夫することができる。
[思考力、判断力、表現力等A話すこと・聞くこと(1)イ及びウ]
- 言葉がもつ意味や役割にこだわって物語を読んだり、より良いプレゼンテーションに向けて、見通しをもって取り組んだりしようとしている。
[主体的に学習に取り組む態度]

4 指導計画(13時間扱い)

学習過程	次	時	学習活動	評価規準
見出す	第1次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○単元の学習内容とつきたい力を知り、見通しをもつ。 ・教師のプレゼンテーションを見て、学習のゴールを明確にする。 ・「おにたのぼうし」を初めて読み、感想をもつ。また、「あらすじ」について確認し、中心人物の変化やその変化のきっかけとなる出来事に気づく。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;"> スペシャルな読み聞かせをしてもらおう。 </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴールのプレゼンテーションの内容や構成、話し方について理解している。 [知・技][思判表 話聞] ・学習内容とつきたい力を知り、自分なりに単元の目標を考えて取り組もうとしている。 [主]
自分で取り組む・広げ深める	第2次	3 (課外)	<ul style="list-style-type: none"> ○性格や気持ちが表れている部分に線を引きながら「おにたのぼうし」を読み、登場人物の性格、気持ちの変化について読み取る。 ○出来事ごとに「おにたと女の子日記 or 手紙」を書き、自分と比べながら読んだり、登場人物に寄り添って読んだりしながら、登場人物の変化を整理していく。 ○自分の気になる表現やお気に入りの表現を見つけたら、「言葉辞典」に追加し、語彙を増やしていく。 ・既習の鬼の物語と比べながら、「鬼」の住む世界について考えを広げていけるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉に着目しながら、文章を読み取り、初めて知った言葉等を「言葉辞典」に書き込みながら、語彙を増やそうとしている。 [知・技] ・友達と自分の読みを比べ、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいている。 [思判表 読] ・言葉にこだわり、粘り強く物語を読み込んでいる。 [主]
		2 (課外)	<ul style="list-style-type: none"> ○以下の●の中から一人4つ選んで「お話言葉辞典」にまとめる。 ●「おにたのぼうし」を読み、おにたの行動や会話から、おにたの気持ちの変化と変化のきっかけとなった出来事と大体のあらすじをおさえ、お話言葉辞典にまとめる。(あらすじ編) 	<ul style="list-style-type: none"> ・物語全体を捉えるために、お話言葉辞典に各々の観点で物語をまとめている。 [知・技] ・友達と自分のまとめたお話言葉辞典を読み合い、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいている。 [思判表 読]

	<ul style="list-style-type: none"> ●「言葉辞典」をもとに、言葉を吟味しながら、おにたや女の子の性格や特徴についてお話し言葉辞典にまとめる。<u>(登場人物編)</u> ●地の文の表現に注目し、おもしろい表現・気になる表現・ときどきする表現等を見つけ、物語の面白さを味わっていく。<u>(おもしろ言葉編)</u> ●登場人物の関係を人物相関図にまとめる。<u>(人物相関図編)</u> ●物語の中に登場する小物について、おもしろい部分をまとめる。<u>(登場するもの編)</u> ●物語の題名について、自分の読みをもとにまとめる。<u>(題名編)</u> ○「お話し言葉辞典」にまとめた情報を台本に加工していく。 <ul style="list-style-type: none"> ・各自まとめたものをグループで共有し、様々な感じ方や捉え方に触れる。 ・並行して自分達のおすすめする本を読み込んでおく。 	
1	<ul style="list-style-type: none"> ○各自が並行読書してきたものをもとに、グループごとに選んだ本のおもしろさを言葉に着目しながら、物語を7つの視点ごとに分析していく。 ・物語の魅力を伝えるためには、どの視点でプレゼンを行うのが最適か考える。 ・現時点の進み具合を確認し、今後の計画等をチーム力アップ表に書き留めておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と自分の線を引いた部分の確認を行い、一人一人の感じ方には違いがあることに気づいている。 [思判表 読] ・聞き手が投票したくなるように工夫して話すための台本や資料を考えている。 [思判表 話聞]
1	<ul style="list-style-type: none"> ○おすすめ部分を聞き手に伝えるための資料を作る。 ・聞き手の反応を想像しながら、各自の資料を工夫する。 ・現時点の進み具合を確認し、今後の計画等をチーム力アップ表に書き留めておく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを行い、自分の今の地点とゴールを比べ、見通しをもってゴールに近づこうと考えている。 [主]
1	<ul style="list-style-type: none"> ○自分が思うおすすめの部分を相手に伝えるためには、どう話せばよいか「お話し言葉辞典」をもとに台本に加工する。 ・聞き手の反応を予想しながら、様々な反応に対応できるよう台本を工夫する。聞き手に伝わりやすいよう、指で指したり、ジェスチャーをしたりする部分についても考えてみる。 ・現時点の進み具合を確認し、今後の計画等をチーム力アップ表に書き留めておく。 	

自分がプレゼンを行う物語の並行読書(課外)


	2	<ul style="list-style-type: none"> ○自分なりに加工した台本をもとに、抑揚・強弱・間・視線を意識しながらプレゼンの練習を行う。 ・聞き手の反応をもとに、台本を改良していき本番に向けて練習を重ねる。 ○聞き手となった時には、積極的に反応し、共感したり、反論したり、指摘したり、感想や質問を伝えあったりしながら、話し手の新たな考えや改良点を見つけるヒントとできるようにする。 ・チームで発表を振り返りながら、聞き手がより読みたくなるような発表にするために相談し、発表を見直しながら準備を行う。 (話し方・ジェスチャー・台本・資料) ・自分の発表を録画したもので振り返りを行い、感じたこと、思ったことを次に生かしていけるようチーム力アップ表に書き込む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話している。 [知・技] ・聞き手にわかりやすく伝えるために、言葉の抑揚や強弱、間の取り方、視線等について考え、工夫して話している。 [思判表 話聞] ・自分の発表の振り返りを行い、自分の今の地点とゴールを比べ、見通しをもってゴールに近づこうとしている。 [主]
まとめあげる	2 (本時) ・朝の読書タイム 第3次	<ul style="list-style-type: none"> ○グループごとにプレゼンを行う。 ・聞き手は、どの本が一番読みたいかを常に考え、「◎判断メモ」に記入しながら、各グループのプレゼンを聞く。 ・全部の発表を聞き終えた後、最終的に読みたくなった本を1冊選び、投票を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話している。 [知・技] ・聞き手にわかりやすく伝えるために、言葉の抑揚や強弱、間の取り方、視線等について考え、工夫して話している。 [思判表 話聞]
		○1位になったチームの本を、スペシャルゲストに読み聞かせしてもらう。	

5. 本時の指導 (13/13) ※プレゼン発表 (12~13/13)

(1) 目標

- ・相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話することができる。 [知・技]
- ・聞き手にわかりやすく伝えるために、言葉の抑揚や強弱、間の取り方、相手を見る視線等について考え、工夫して話することができる。 [思判表 話聞]
- ・友達の発表を聞き、情報と情報を結びつけて聞いたり、自分の思ったことを話し手に伝えたり等、反応しながら聞くことができる。 [思判表 話聞]

(2) 展開

時配	学習内容と学習活動	○指導と支援 ※評価	資料
3	1 本時の見通しをもち、学習課題を知る。	<ul style="list-style-type: none"> ○いよいよ最終発表を行い、最後には投票をしてスペシャルな1冊を決めることを確認する。 	読書カード
		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">  スペシャルな1冊を決めよう。 </div>	

<p>3 5</p>	<p>2 前時までの振り返りを生かして、グループごとに最終発表を行う。</p> <p>【話し手】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「どうしたら聞きやすいかな。」 ・「資料はどうしたら見やすいかな。」 ・「耳を傾けている人がいるから、もっと大きな声で言おう。」 ・「見えにくそうにしている人がいるから、指で指してみよう。」 ・「ここは大きな声で言おう。」 ・「ここでこの資料を出そう。」 ・「ここでジェスチャーを入れてみよう。」 <p>【最終発表の想定される台本イメージ】</p> <p>では、いよいよ登場人物について少し詳しく見ていきましょう ここでまた新たな発見があるかも？</p> <p>このお話には、こんな男の子が出てきます。 名前がわかる人いますか？一紙を見せよう この子（おにた）は、どんな子だと思いますか？（挿絵から想像させる） 一人人が聞く。 ★誰かの意見を聞いたら、一応じだとする人？ 手をあげてもらおう</p> <p>物語の中にこんな言葉がありました。 ★引用させる 絵本を見せる 「はつかしがりのおにたは、見えないように、とても用心していたから です。」（みんなで読んでみる） どうですか？一人人が聞く。 ★誰かの意見を聞いたら、一応じだとする人？ 手をあげてもらおう</p> <p>こんな言葉もありました。 ★引用させる 「おにたは、一生けんめい、さっき女の子が言ったとおりに言いました。」 （みんなで読んでみる） どうですか？一人人が聞く。 ★誰かの意見を聞いたら、一応じだとする人？ 手をあげてもらおう おにたが、女の子が言ったとおりに何て言ったのが気になりませんか？</p> <p>（みんながマイナスなおにただけを想像した挿絵） 実は、おにたは「動きがりの屋」「用心深い」「弱そう」だけではないの です。 鬼の子どものように、強い子なのでしょうか。（キャッチフレーズを見せる） さあ、本当のおにたが気になりませんか？ ぜひ、みんなで投票してスペシャルゲストに読み聞かせをしてもらいましょ う。</p> <p>（みんながマイナスとプラスのおにたを想像した挿絵） 実は、○○さんの言った通り、「弱そう」や「動きがりの屋」だけでなく、 「やさしい」部分もあるおにた。 住む場所によって、変化していくおにたの様子がおもしろいです。（キャ ッチフレーズを見せる） なぜ、おにたがそんなに変化していくのが気になりませんか。 ぜひみんなで一緒に読み聞かせをもらい、みんなで確かめてみましょ う。</p> <p>【聞き手】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「えっ。」 ・「へえ…」「なるほど。」 ・「おもしろそう。」 ・「読んでみたいな。」 ・「こんな登場人物がでてくるんだ。」 ・「この引用からだ、こんな性格な気がするな。」 ・「この言葉の表現おもしろいな。どんな意味なんだろう。」 ・「この続きどうなるのかな。」 ・「あのお話の登場人物と似てる。」 ・「こんな鬼もいるんだ…。」 ・「さっき○○って言っていたから、もしかして…？」 	<p>○「聞きやすい・伝わりやすい発表になること」、「投票するために聞きも らさず判断の材料になるような質問 をしていくこと」の2点を働きかけ ていく。</p> <p>※相手を見て話したり聞いたりすると ともに、言葉の抑揚や強弱、間の取 り方などに注意して話すことができ る。</p> <p>[知] (プレゼンテーション)</p> <p>※聞き手にわかりやすく伝えるため に、言葉の抑揚や強弱、間の取り方、 相手を見る視線等について考え、工 夫して話すことができる。</p> <p>[思] (プレゼンテーション)</p> <p>→人前で話すことが苦手な児童も安心 してできるよう、共感したり、反応 したりしながらどんな発表でも受け 入れられるような雰囲気づくりをす る。</p> <p>※友達のプレゼンテーションを聞き、 情報と情報を結びつけて考えたり、 自分の思ったことを話し手に伝えたり 等、反応しながら聞くことができ る。</p> <p>[思] (聞いている態度)</p> <p>○「スペシャルな1冊」を決め、その 理由も書くことを確認する。 ○自分の1票の重みを感じながら大切 に投票できるよう、1票の大事さを 知らせる。</p>	<p>絵カード 台本 譜面台 7-シート</p>
<p>5</p>	<p>3 読み聞かせをしてもらいたい1冊を決 め、投票を行う。</p>	<p>○「スペシャルな1冊」を決め、その 理由も書くことを確認する。 ○自分の1票の重みを感じながら大切 に投票できるよう、1票の大事さを 知らせる。</p>	

2	4 本時の学習をふり返るとともに、次時の見通しをもつ。	<p>○本時をふり返り、ライバルとなりそうな物語を挙げさせ、その理由も考えさせる。</p> <p>○次時は、投票結果を発表し、「スペシャルな読み聞かせ」が実現することを伝える。</p>
---	-----------------------------	--

板書計画

①
振り
返り

鬼のお話 MAP

発表
スペース

③
スペシャルな一冊を決めよう。

スペシャルな読み聞かせをしてもらおう

資料 想定する発表カード

<登場人物編①>



<登場人物編②>



<あらすじ編>



<おもしろ言葉編>



<登場するもの編>



<題名編>



<人物相関図編>



本時の場の配置



〔資料 実態調査の項目〕

1) つけたい力に関する実態

- ① 物語を読む中で、登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句を増やし、普段の生活の会話や文章の中で使うことができるか。
- | | |
|--|-----|
| ア 登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句を見つけることができない。 | 2名 |
| イ 登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句を見つけることはできるが、それを自分のものとして使うことができない。 | 22名 |
| ウ 登場人物の様子や行動、気持ちや性格を表す語句を見つけ、普段の生活の会話、文章の中で使うことができる。 | 8名 |
- ② 相手に聞きたくくなるような、伝わりやすい話し方について理解しているか・実践できているか。
- | | |
|--|-----|
| ア 相手が聞きたくくなるような話し方の必要条件について十分に理解している。 | |
| ※必要条件 適切な声の大きさと話す速さ | 6名 |
| 声の抑揚 | 2名 |
| 聞き手の様子を感じ取れる視線 (児童の回答：相手のほうを見る) | 6名 |
| 強調したい箇所で、聞き手の注意を引く行為や表現 (間・お誘い・呼びかけ) | 0名 |
| 聞き手にわかりやすい身振りでの表現 | 0名 |
| 相手意識 | 2名 |
| (かまないようにする・すらすら言う・ていねいな言葉使い・おかしくならないように等、自分が上手に言うためのことを意識している人が多い) | |
| イ 必要条件を一つでも自ら実現させて話すことができる。 | |
| ・適切な声の大きさと話す速さ | 24名 |
| ・声の抑揚 | 1名 |
| ・聞き手の様子を感じ取れる視線 (児童の回答：相手を見ながら話す) | 20名 |
| ・強調したい箇所で、聞き手の注意を引く行為や表現 (間・お誘い・呼びかけ) | 4名 |
| ・聞き手にわかりやすい身振りでの表現 | 1名 |

- ③ 友達のプレゼンテーションを聞きながら、必要に応じてメモしたり、質問したり、反応しながら聞き、話し手が伝えたいことを捉え、自分の考えをもつことができる。
- ア 友達の話した内容について、感想をもつことができる。 26名
 - イ 友達の話した内容について、必要だと思ったことをメモすることができる。 13名
 - ウ 友達の話した内容について、質問することができる。 19名
 - エ 友達の話した内容について、反応しながら聞くことができる。(あいづち) 8名
 - オ 友達の話したことについて、アドバイスをすることができる。 13名
- 2) 表現する内容の準備状態に関する実態
- ① 物語を読んで好きなところやいいなあ、おもしろいなと思ったところを抽出できる。
- ア 自分なりに物語を味わい、物語の魅力を見つけることができる 32名
 - ・内容におもしろさを感じている 24名
 - ・言葉遣いや言葉の表現におもしろさを感じている 18名
 - ・絵におもしろさを感じている 3名
 - イ 物語の魅力を見つけることが難しい 0名
- ② 物語を読み、気になる表現やおもしろいと思った部分、おすすめするための要素となる事柄を集め、台本を作ることができる。
- ア 物語を読んで、おすすめするための要素を集めるのが難しい状態にある。 0名
 - イ 物語を読んで、おすすめするための要素を集められているが、それらの情報を台本にする事柄に精査することが難しい状態にある。 19名
 - ウ 物語を読んで、おすすめするための要素を集め、それらの情報を精査して、台本にする事ができる。 13名

視点1 想像できる話し手

- ①相手を読みたくさせるプレゼンの構成(情報の精選・問いかけ・視点選択・資料の提示・話し方)
- ②相手の反応を予想しながら、聞き手を巻き込む台本の作成

自分が読んだ物語を、聞き手にも「読みたい!」と思わせるようにするプレゼンにしていく言語活動である。まず、プレゼンに盛り込む情報の精選、構成、視点(どんな方向から物語をアピールするか)を決めていくために、物語の情報で「お話言葉辞典」を作成した。そしてそこに集められた情報を俯瞰し、どんなプレゼンにしていくのかを考えたり話し合ったりした。この学習を通して、「物語を少しだけ紹介してみる」、「どんな物語か予想はさせるが、正解は明かさない」、「謎めいた一節の引用をプレゼンに盛り込む」などすれば、聞き手が「読みたい」とおもってくれるのではないかという、聞き手を想像する姿を実現させることができた。

具体的には、「鬼」が登場する物語を取り上げ、それぞれが選んだ物語の魅力を伝えていった。本単元を通して「想像できる話し手」の実現を意識して取り入れたことは、以下の3つである。

(1)物語のことをよく知り、情報収集を行う。

各自がおすすめる絵本を読み、登場人物の特徴や自分の思ったことを絵本に書きこんでいく。そうすることで、登場人物の性格や気持ちを捉え、物語全体の大体のあらすじをつかむ。また、おもしろい言葉や気になった表現等にも目を向けられるようにした。そして、書き込みをもとに物語の魅力を「お話言葉辞典」に視点ごとにまとめていく。各自まとめたものを班で持ち寄り、自分の気づかなかった読みに気づいたり、新たな物語の魅力を見つけたりすることができるようにした。



絵本への書き込み

- ・「わし、おにでんねん。すんまへん」
→やさしい、関西弁を使っている
 - ・「じごくづとめのサラリーマン」→悪い人
 - ・挿絵→身だしなみがいい
- と読み取っている。

お話言葉辞典

絵本に書きこんだものを視点ごとにまとめている。登場人物①のところ、絵本への書き込みでは「じごくづとめのサラリーマン」→「悪い人」と読み取ったが、全体を読んだことで「やさしい」「カッコいい」に変化している。

(2)自分の行うプレゼンの視点ごとに、聞き手の興味を引きそうな挿絵や引用を厳選する。

各自の「お話言葉辞典」をもとに、班で物語の魅力を話し合い、それぞれがプレゼンする視点を定める。その後、自分の視点に合った引用や挿絵を見つけ、発表カードを作成していく。引用だけでなく、聞き手が読みたくなるようなキャッチフレーズや自分の思いを入れたり、見せる順番を工夫したりして情報を小出しにしながら聞き手が楽しく聞けるよう工夫した。

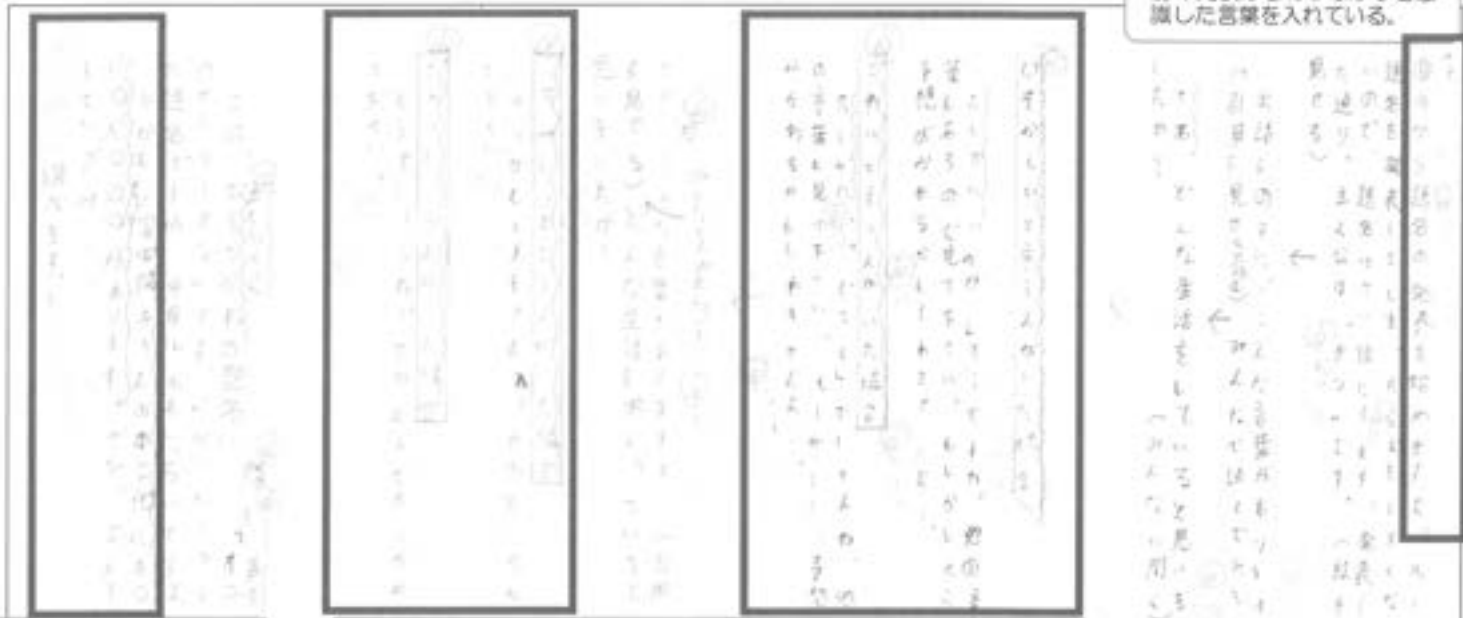
発表カード（登場人物編・登場するもの編・人物相関図編）
紹介したい挿絵とともに、聞き手が気になりそうな引用を入れる。その他はキャッチフレーズや自分の読みを入れる等、自分たちで選択できるようにした。

(キ)：キャッチフレーズ
(自)：自分の読み
(引)：引用

(3)お話言葉辞典と発表カードをもとに聞き手の反応を予想しながら、台本に加工していく。

お話言葉辞典と発表カードをもとに、プレゼン用の台本に加工していく。加工する際には、聞き手が想像を膨らませながら聞くことができるよう参加型の台本とした。挿絵のみでどのような印象をもつか想像させたり、引用からどのようなお話を想像させたり、さらには挿絵・引用を結び付けて考えたりしながら、様々な視点ごとの発表を結び付けて考えていけるようにした。

前の発表からのつながりを意識した言葉を入れている。



同じ作者の本を紹介。

相手の反応を2パターン考え、それぞれの対応について書き分けている。

前の発表からのつながりを意識した言葉を入れている。



聞き手が気になるような言葉を考え、追加している。

発表の練習をする過程で、班で相談したり、試行錯誤しながら何度も台本を書き換えている。

視点2 積極的な聞き手

- ① 最後に鬼のお話を1つ選ぶという必要感を持たせ、選んだ理由につながる情報を、プレゼンを聞いてメモしていく。
- ② プレゼンを聞きながらの独り言やつぶやきを自由に表出させる。

最後にどの物語を聞きたいか、それを選ばなくてはいけないという必要感を明確に持たせた。同時に、プレゼンを聞きながら聞き手が自由に反応し、自分の想像だけでなく他者のつぶやきからも想像を広げていけるような雰囲気。環境をつくった。そうすることで自ずと共感や、自分との比較が生じ、積極的に聞く姿が表れてくるのではないかと考えた。同時に、同じ物語を様々な視点から眺めるような読み方にもつながるものと考えた。

具体的には、以下の2つのことを行った。

- (1) 目的をもち、記憶や印象で選んでしまうことを避けるために、根拠となる感想や考えの情報を記す「判断メモ」を用意する。

おんいそ	話しかけてさ！ プレゼンのじゆんをのらい！ 発表カードがすてき！ ジェスチャーがのらい！ 聞いていて楽しい！！ *判断メモ* 100%	●●○○△△	なんで鬼をいれ るか家に気が なりました。
見ゆのがね	話しかけてさ！ プレゼンのじゆんをのらい！ 発表カードがすてき！ ジェスチャーがのらい！ 聞いていて楽しい！！ *判断メモ* 100%	●●○○△△	人たしにかいき をやる、うれたけ いひようなるの。

話し手の様子やどこで読みたくなったのかを書き残しておくことで、最終の判断に役立った。また、読みたい度メーターをその都度書いておくと最終判断がしやすい。

(2)聞き手の素直な反応を受け止め、物語の想像を広げていく。

同じ挿絵でも、人によって感じる印象が違っていたり、同じ言葉の引用でも、その言葉から受ける読みは人それぞれであったりする。どの感じ方も受け止め、自分の考えと比べたり、共感したりしながら、自分の考えを広げていけるよう、思ったことを率直に言う、友達の意見に素直に反応することができる環境作りをした。

子どもたちのやり取り(登場人物編)

話し手(S) : 発表の準備「少々お待ちください。」

聞き手(L) 「ちょっと上げてもらった方が…。(資料)」

S: 「それでは登場人物について発表します。まずこの絵を見てください。」

資料の貼り方を考えている。

この絵からこの人はどんな人だと思いますか。」

L: 「とてもやさしいと思います。」 「あー。(大勢)」

S: 「確かにそうかもしれませんね。」

L: 「遊びが好きそうです。」 「おー。笑(大勢)」

S: 「確かにそれもありえるかもしれませんね。」

L: 「誰とでも仲良くなれそうです。」 「おー。(大勢)」

S: 「確かに!! それもありえるかもしれませんね。」

L: 「ありえる! ありえる! (大勢)」

L: 「やんちゃです。」 「同じです。」 「あー! (大勢)」

S: 「確かに・・・。」

「時間がないので次にいってもいいですか?」

時間との折り合いを考えている。

L: 「はい。」

S: 「実はこんな引用、言葉があったのです。」

「(指さし) みなさん読みましょう、さんはい。」

L: 「へーい、かしこまりました。(引用)」

S: 「この言葉を見てこの人はどんな性格だと思いますか。」

L: 「なんか、店長になんか・・・。」

S: 「確かにそれもありえるかもしれませんね。」

L: 「ラーメン屋でバイトしてそう。」 「あー。(大勢)」

S: 「あー。確かにそれもありえるかも。」

L: 「酒屋とか寿司屋でバイトしてそう。」

S: 「なるほど。」 「次にいってもいいですか?」

聞き手に進み具合を確認している。

L: 「はい。」

S: 「それでは二つ目の引用を見てみましょう。」

「みなさん読みましょう、さんはい。」

L: 「(引用) わあ、おれの大好きな目玉焼きやあ。」

さすが母ちゃんわかってんなあ」

S: (絵本の挿絵を見せる)

L: 「わあ!!」 「おおー。」 「にらめっこしてるみたい!」

S: (挿絵を画面カメラに映す)

L: 「ぎゃー!!」

S: 「(だけ) 愛妻弁当を食べた後、居眠りをしてしまい大変なことになってしまいました。」

鬼なのにこわくないって不思議ですよね。」

ぜひ投票してくださいね。」

L: 「おー」 (拍手)

L: 「愛妻弁当ってなんですか?」

S: 「愛妻弁当っていうのはね、確か主婦が夫に愛しているときに作ってくれるお弁当。」

L: 「へえ。(大勢)」

L: 「てことは夫いるの?」

S: 「それは人物相関図でわかりますよ。」

少し余韻を残したまま終わりにしている。

～相関図編 省略～

子どもたちのやり取り(登場するもの編)

S: 「次にお話に出てくる物について話します。」

このお話に出てくる物は(指さし)金棒です。

この絵を見てどのような金棒だと思いますか。」

L: 「こわっ!」

S: 「私がこれから3つ言うので、

どれかに手を挙げてください。」

1つ目は(ジェスチャー) 当たると痛い金棒だと思う人?」

L: 「全部言ってからの方がいいんじゃない?」

S: 「あ、そうだね。」

「2つ目は持つととても重い金棒。」

3つ目は当たっても痛くなくて軽い金棒。」

1つ目だと思う人手を挙げてください。(問)」

「おー。」

「2つ目だと思う人手を挙げてください。(問)」

「おー。」

「3つ目だと思う人。」

L: 「あ、でもこっちか。やっぱ俺2!」

S: 「(低めの声で) どれが正解ですかねえ。」

私は最初当たると痛い金棒なのかなと思っていました。」

でも・・・(問)。それは・・・(問)。

当たっていま・・・(問) せんでした。」

聞き手の反応で台本の流れを変えた。

話す間を散らしてあげて、聞き手を引きつけようとしている。

L: 「はははは。(大勢)」

S: 「さあ、次の引用を見てみましょう。」

みんなで読みましょう、さんはい。」

L: 「(引用) 金棒重くて・・・。」

S: 「ありがとうございます。」

でもこの引用では、当たっても痛くなくて軽い金棒とも、

とても重い金棒ともちゃんとはわかりません。」

L: 「たしかに・・・。」

S: 「でも2つ目の引用はどうでしょう。めくってみましょう。」

みんなで読みましょう、さんはい。」

L: 「(引用) 肩こるわ、もう歳やで。」 (笑いが起きる)

「まさか!?!」

S: 「私はこの言葉で、当たっても痛くなくて軽い金棒とは思いませんでした。私はこの言葉でとても重い金棒とも

とは思いませんでした。でも、とても重い金棒なのかなとは思いました。理由は歳をとっているというのものもあるかもしれないけど、相当重い物を持たないと肩は凝らないと思ったからです。」

L: 「うんうん! (大勢)」

S: 「どうでしたか。金棒はとても重いとわかりましたか。」

1票でも投票してくれたら嬉しいです。」

L: 「おー!!」 (拍手) 「おもしろそう!!」

「悪い人をこらしめるのかな。」

「次はあらすじかな、おもしろ言葉かな。」

「え、あらすじないの? 題名だ!!」

～題名編 省略～

聞き手はどの発問に対しても積極的・素直に反応している。

指導を振り返って

(1)視点「想像できる話し手」に迫れたか

～聞き手の反応を想像しながらのプレゼンが「想像できる話し手」の実現に功を奏したか～

本単元では具体的には、「聞き手に物語を想像させながら情報を小出しにしていく発表カードの作成」と、「聞き手の反応を想像しながら書く台本づくり」を通して、参加型のプレゼンを試みた。自分のおすすめる物語を友達に「読みたい!」と思わせ、投票してもらうためにプレゼンを行うことをゴールとして設定し【手立て1】【手立て5】、聞き手に自分の思いを伝えるにはどのように話したらよいかを考えながら取り組めるようにした。【手立て2】

発表カードを書く段階

その結果、発表カードを書く段階では、各自発表カードを書きながら、班の中での確認も並行して行っていく姿が自然と見られた。【手立て3】そこで、同じ引用を使っている児童がいたり、自分が伝えたいことへのより最適な引用を見つけている児童がいたりして、班の中で話し合いが始まり、引用や挿絵の見直しが行われていた。その活動を通して、班の中で子どもたちなりに物語の魅力を伝えるために情報を厳選していくことができた。

台本を書く段階

台本を書く段階では、聞き手の反応が1パターンでないことに気づいた児童がおり、その児童を中心に「何パターンか相手の反応を考えておこう」という児童が増えていった。その中で、相手の反応ごとに自分はどう返答をしていくのか、また、聞き手の反応によってプレゼンの流れが変わってくることも気づき、プレゼン全体の流れを意識しながら台本を書くことができた。その結果、「予想外の反応があった時にも困って止まってしまうことを防げた」と実感している児童もいた。

台本完成後の発表練習→台本改良

さらに、台本が完成し発表練習をしていく中でも、自分が求める返答が聞き手から返ってこないことに戸惑い、自分が答えてほしいことを聞き手から引き出すには、どんな問いかけをしたらよいかを試行錯誤しながら、改良に改良を重ねて台本を完成させていた。【手立て3】そうすることで、人前で話すことに対して苦手意識があった児童も「班での練習の中でいろんな反応が出たので、本番困らずにできた」「友達がたくさん反応してくれて嬉しかった」と書いている児童もいた。

練習の中で態度面も意識

台本が完成し、グループ内で発表練習していく中では、話し手と聞き手に分かれ、実際に問答を行いながらの練習を重ねた。練習を重ねる中で、「ここで聞いている人を見たほうがいいよ。」「絵を指さしながら言ったらわかりやすいかも。」等、それぞれの立場に立ってアドバイスをし合うことができた。【手立て4】

毎時間の振り返りで進み具合を確認

毎時間の最後に「チームカアップ表」を用いて、チームの進捗状況や自分の今の段階を確認しながら振り返りを行った。そうすることで、次にやらなくてはいけないことを各自が気づき、先を見据えて学習を進めることができた。グループ内だけでなく、個人でも次時にやるべきことを決めて取り組む姿も見られた。【手立て6】

チームカアップ表 (11月11日) (11月12日)									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ
		かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ	かみ

プレゼン当日

プレゼンでは、話し手も聞き手の反応を見ながら返答をし、台本はあるもののその都度プレゼンの流れを確かめながら進めていた。また、指名する人数を予めおおよそ決めていても、どうしても発表したい友達がいた時には妥協したり、友達をつぶやきで台本と違う流れにしたりとその時の聞き手の反応に応じて対応する姿も見られた。相手と問答をしながらの台本を考えていくことは、先を見通し、臨機応変に対応していく力を育てていくことにも有効であった。

(2) 視点2「積極的な聞き手」に迫れたか

～従来の「発表—質問—質疑応答」という形式ではなく、「する側」と「される側」の問答が途中途中に入ったプレゼンが「積極的な聞き手」の実現に功を奏したか～

本単元では、視点2の実現のために具体的に、「聞き手がプレゼンを聞きながらの独り言、つぶやきは我慢せず、自由に発言できるような環境づくり」を行った。【手立て4】

その結果、プレゼンの中で常に問答が繰り返されている状態ができ、その都度、挿絵や引用の言葉から物語について全員で想像を膨らませていくことができた。情報を小出しにすることで、聞き手は1つ1つの情報を大切に、またその他の情報と結びつけて、探偵のように自分なりに物語を考える姿が見られた。聞き手は、他の友だちのつぶやきによって、共感したり、自分の意見と比べたり、違う角度から物語を考えたりと様々な角度から想像を広げていた。また、1つの問いかけに対して、聞き手が自由に自分の言葉で語っていくことで、話し手にとっても新たな発見があり、自分の考えを確かなものにすることができた。1人のつぶやきに対して「え？」や「確かに！」「なるほど…」等、様々な反応がでることで児童の思考は止まることなく、たくさんの情報を結びつけながら物語を想像していく姿が見られた。

(3) 協働が実現できたか

これまでの児童は、話し手は「言いたいことを最後まで流暢に言い切る」ことを目標とし、聞き手は「最後まで黙って聞き、拍手をしてから質疑応答」というような一連の作業のようになっていた。「従来の「発表—質問—質疑応答」という形式のプレゼンでいくと、もう終わってしまっているプレゼンに対しての質疑応答が交わされ、そのプレゼン全体の内容を把握していなければ、質問の意図も読み取れず、それに対する返答も理解することはできない。そのため、本単元でのプレゼンは、「プレゼンをする」—「それを聞く」という一方向の活動ではなく、プレゼンを「する側」と「される側」の「対話」を盛り込んだものにし、従来の「発表—質問—質疑応答」という形式ではなく、「する側」と「される側」の問答をプレゼンの途中途中に入れていった。その問答を展開する中で、「〇〇のお話に出てくる鬼と似ている！」や「〇〇に出てくる鬼とは違って…」等、他の物語と比べて考える児童もいた。思いもよらない友達の意見に「確かに！！」と驚嘆する児童や「なるほど…」とうなずく姿も見られた。双方向の対話を実現したことで、今まで気づかなかった、考えもしなかったことに直面し、新たな考えを生み出しながら物語について、各々の読みをもとに全員で考えていくことができたと同時に、やりとりの中で生まれ、広がっていく想像をもとに物語を楽しむ姿が見られた。

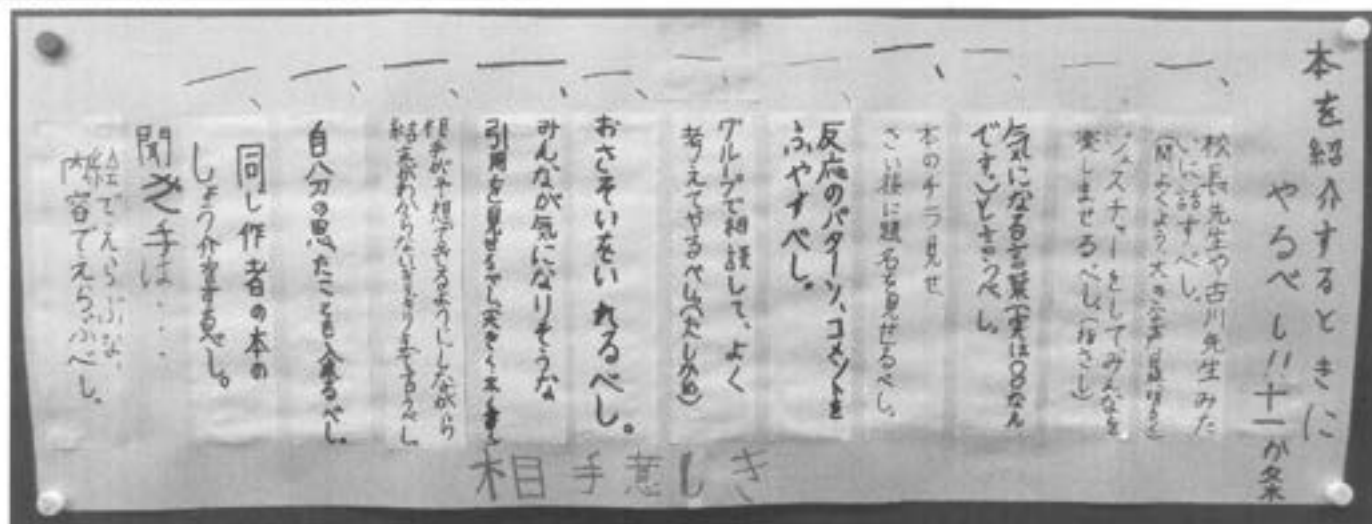
(4) 子どもたちの姿からどんな言葉の力がついたか

学習指導案でも述べたように、本単元でつけた力は5つあった。

- ① 話し手となり自分がおすすめる物語のプレゼンをする際には、ほとんどの児童が物語に出てきた言葉を引用したり、プレゼンの中に盛り込んだりしながら新しい言葉に触れることができた。しかし、聞き手となった時のつぶやきでは、自分の中で使い慣れている言葉が多かったように感じる。つまり、新しい言葉に触れてはいるものの「自分のものとして使いこなす」までには至っていない児童が多い。たくさんの言葉に触れることも大事だが、自分の言葉として使えるよう落とし込んでいく必要がある。
- ② ④言葉の抑揚や強弱、間の取り方等については、意識できるよう台本に書きこんでいた児童がほとんどであった。班での練習でも、話し手と聞き手に分かれ、相手意識を合言葉に、指差しや間の取り方、目線等についても、アドバイスをし合っていた。そのため意識して練習していた児童は多い。しかし、本人はやっているつもりでも、それが聞き手にも伝わっていたのかと考えると…そうでない児童もいる。ICT 機器を利用し、自分のプレゼンの姿を見る機会をより多く設けていれば、更に子どもたち同士で改善できたかもしれない。しかし、構成の面から考えると、聞き手の反応によって台本を少しずつ修正しながらプレゼンを行う姿も見られ、臨機応変に考えて修正していく力が付いてきたように感じる。

- ③ どの児童も友達の意見に共感したり、比べたりしながら想像を広げることができた。自分の意見と違う意見が出た際にも、否定することなく「確かにそれもあるかもしれないけど、こういう考えもあるかもしれない。」等、友達の意見を尊重して自分の考えを述べることでできた。また、プレゼンの中で小出しにされていく情報を少しずつ結び付けて、物語について考えることができた児童も少数ではあったがいたため、その児童の発言をもとに子どもたちの思考がより複雑になっていた場面も見られた。
- ⑤ ほとんどの児童が「判断メモ」をもとに投票するお話を選んだり、プレゼン中の問答に参加したりすることができていた。一人一人の発表だとうまく発表できない児童も、つぶやくことで参加することができ自分事として捉えることができていた。挙手制の発問がもっとあってもよかったのではないかと考える。

(5) 講師の指導のもとに学習後に行った活動



『本を紹介するときのやらべし11か条』
その後、各班で考えたものを持ち寄り、クラス全員で考え作成した。

みんながプレゼンした本 どんな本かな？

本の題名	どんな本かな？
オコエいじ	...
おくらん	...
オコエマリアーゴ	...
おこえがし	...
オコエがし	...
おひさし	...
せうれきと人権いかに	...
おさだごころ	...

『みんながプレゼンした本 どんな本かな？』
その後、各班でプレゼンした本を学級に用意し、読みたくなった本を自由に読めるようにした。

1 単元名 もっとしりたいな もり小の先生たち ～「先生かるた」で伝え合おう～

2 単元について

(1) 単元観および系統

本単元は、学校の先生にインタビューをして知り得た情報を「先生かるた」として表現し、楽しく伝え合うという学習である。また、ここで作成し、遊んだ「先生かるた」は、次年度の新1年生を迎えた際の学校紹介に活用するものとする。ここでは、以下に示す力を身につけさせていこうと考えている。

- ①言葉には経験したことを伝える働きがあることに気付き、姿勢や口形、発声や発音に注意して話す力
[知能及び技能(1)言葉の特徴や使い方に関する事項 ア及びイ]
- ②共通・相違・事柄の順序など情報と情報との関係について理解し、話や文章で表現する力
[知能及び技能(2)情報の扱い方に関する事項ア]
- ③インタビューしたことやその時の様子などから話題を決め、かるたの読み札やヒントになる事柄を選び、話す事柄の順序を考える力
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと ア及びイ]
- ④インタビューする相手やかるた遊び(読み札を読む時、ヒントを出す時等)の聞き手との場、状況、反応に応じて声の大きさや速さなどを工夫し、楽しく話す力
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと ウ]
- ⑤かるたの読み手が知らせたいことを落とさないように集中し、楽しみながら聞く力
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと エ]

上記からわかるように、本単元は、初めての学校のいろいろな場所を知るという年度初めの学校巡りに近い「学校探検」とは違い、学校の先生や働いている人たちについて知りたいことを考えてインタビューし、その知り得た情報を「かるたの読み札」とかるた遊びの「ヒント」にリメイクし、更に相手に伝えるための話し方・聞き方が必要とされる単元である。そこで、次に、本単元の関連する児童の学習履歴を示す。

児童はこれまでに『だれが食べたのでしょうか』では「どうぶつクイズブック」を、『はたらくじどう車』では「のりものかるた」を作成し、紹介し合うという学習活動を経験してきた。どちらも、教材文を読み、並行読書をしてきた絵本・図鑑等から必要な情報を書き抜き、「クイズ」や「かるたの読み札」にリメイクすることを学んでいる。そして、のりものかるたの読み札を考える過程では、教材文に登場する乗り物と、自分が選んだ乗り物を比較し、似ているところや違うところを読み札の内容に加え、聞き手の想像を促すことに挑戦した。

また、「話すこと・聞くこと」では、今年度はコロナ禍で入学当初から活動に制限があり、教室全体に響く発声を十分に経験できないことが続いており、他学年のよい手本は放送から聞こえてくるものに留まっている。しかし、学級の中で2学期中旬から後半にかけ、「どうぶつクイズブック」の紹介、「のりものかるた」の読み札を聞き手に聞こえるように話す経験により、耳を傾けて聞く経験を積むことができた。日常活動では、日直のスピーチや友達のよい行いを認める「今日のきりり」の紹介を行い、聞いたことに対して感想やお礼、今後の抱負を返し、言葉のキャッチボールを繰り返し行っている。

本単元では、こうした学習履歴を生かし、まず、初めてとなる少人数グループによるインタビュー形式で先生方の情報を集め、それを「先生かるたの読み札」とかるた遊びの「ヒント」にリメイクするという言語活動を試みる。その上で、お互いに知り得た情報をヒントつきで楽しく伝え合う「かるた遊び」を行うこととする。具体的には、3人1組のグループで以下のような「かるた遊び」を考えている。

- (読み手1・2・3)「では、読みます。『おいしいね えいようしっかりかんがえる ラッキーにんじんおおあたり』」

- (聞き手側) 「ねえ、ねえ、もっと知りたいな。ヒントを3つ聞かせてよ。」
 (読み手1) 「この先生は〇〇先生と同じで本を読むことが好きです。」
 (読み手2) 「〇〇先生はにんじんが大好きですが、この先生は苦手だそうです。」
 (読み手3) 「この先生は、アナウンサーみたいにお昼の放送で元気な声を聞かせてくれます。」
 (読み手1・2・3) 「先生かるた はい、どうぞ。」
 (聞き手側) グループで相談してかるたを取る。

この「かるた遊び」に至るまでのポイントは、以下の3つである。

- ①インタビューをする際にはマナーを知り、実践することで、今後の生活につながる気持ちのよい話し方・聞き方を身につける。
- ②インタビューの内容を吟味し、更にかるた遊びに必要な情報を整理して読み札とヒントをつくる。
- ③読み手と聞き手が楽しくかけ合いながら報告し合える「かるた遊び」になるように、リズムよく読み札を読み、ヒントの順番を考える。また、知らせたいことを落とさないように集中し、楽しく聞く。

上記の3点を授業者が自覚しながら指導を展開していくことで、本校が目指す「想像する話し手と積極的な聞き手」の姿を現実のものとしたい。

(2) 児童の実態

(男子15名 女子13名 計28名 女子児童2名については実態把握困難なため、調査対象としないこととする。)

以下の点について実態の把握に努めた。

ア つけたい力に関する実態

イ 単元で展開する言語活動の準備状態に関する実態

具体的な調査の結果については、本指導案の最後に資料として掲載した。以下、調査結果を総括して述べる。

上記アに関して言えば、話し手になった時の理想は言葉では分かっているが、実際の場面になると、姿勢が保てなかったり、相手に届く声が出せていなかったりする児童がいることがわかる。今年度は、小学校生活スタートからマスクを着用しており、控えめに声を出すことを求めることが多く、上級生のよい手本を見て学ぶ機会をもつことができなかった。1年生にとっては全てを求めることが難しかったといっても過言ではない。しかしながら、その中でも、聞き手に体を向けて話をする、大きな声ではきはきと話す友達の姿をモデルとして過ごしてきた児童は、こんな時こそ、話す時、聞く時は相手に自然に体を向けるというスタイルを十分ではないかもしれないが、意識し、築き上げてきた。さらに、その輪を広げていく声かけや励まし、教師の前向きな助言、友達同士の認め合いを今後も大切にしていきたいと考えている。

一方、本単元の言語活動に対する準備状態の実態から、知り得た情報を整理し、かるたの読み札やヒントにリズムやフレーズの条件つきで表現することは、約半数の児童にとって、自分の力だけでは困難であると考えられる。決められたことについては、自信をもって話せる、話したいと思っている児童が多いことから、かるたの読み札作りやヒント作りの表現の際には、少人数のグループでアイデアを出し合ったり、時には教師の助言を参考にしたりしながら、本人も周囲も納得するように作成していくことが必要であると考えられる。わかりやすいモデルの提示、情報が整理しやすいワークシートの工夫等をしながら、自信をもって話す内容を決めることができるようにしていく。

本学級の児童は、ゲーム的要素のある学習は大好きであり、時にけんかもするが、ゴールを示すと一生懸命に進む子ども達である。今回は、4月にお兄さん、お姉さんになる自分達の姿を想像する楽しみも励みにしながら楽しく一時間一時間を積み重ねていきたい。

(3) 指導観

以上の実態を踏まえ、以下の点に留意して指導にあたる。

- かるた作りについては経験があるが、リズムのよいフレーズを意識して読み札を考えることは初めてである。導入部分で教師のモデルを示し、イメージをもたせることから始める。

- ヒントを出す順番や間を感覚として捉えるために、朝の会のスピーチのテーマをヒント付きのクイズにする期間を設ける。その際、聞き手側があいの手をうち、双方が一体となる楽しさやリズムのよさを味わえるような一連の流れを意図的に作り、体験させておく。
- 話を聞きたい先生と、聞きたいことを考えて選び、同じ先生に聞きに行く者同士で少人数(3人)のグループを作る。その中で、インタビューのマナー・対話の仕方の指導を含め、活動を展開していく。グループ学習はコロナ禍であるため経験がほとんどない。そこで、必要な内容を順序良く話し合えるナビ的なワークシートを用意し、その内容に沿って話し合いをさせる。
- かるたの読み札にはその先生を表すキーワードを、ヒントの中には皆がよく知っている人物等との共通点、相違点について触れることができるように促すワークシートを活用する。

3 単元の目標

- 言葉づかひやあいさつの仕方、話の聞き方に気をつけてインタビューをしたり、相手にとって聞き取りやすい話し方をしたりすることができる。
[知能及び技能(1)言葉の特徴や使い方に関する事項 ア及びイ]
- みんながよく知っている人物等とインタビューをした先生の共通点・相違点を探し、読み札やヒントをつくることができる。
[知能及び技能(2)情報の扱い方に関する事項ア]
- インタビューしたことやその時の様子などから読み札やヒントの内容を決め、聞き手の反応を想像しながらヒントを出す順序を考えることができる。
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと ア及びイ]
- インタビューする相手やかるた遊び(読み札を読む時、ヒントを出す時等)の聞き手との場、状況、反応に応じて声の大きさや速さなどを工夫して話すことができる。
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと ウ]
- かるたの読み手が知らせたいことを落とさないように集中して聞くことができる。
[思考力、判断力、表現力等 A 話すこと・聞くこと エ]
- 気持ちのよいインタビューの仕方について考えたり、知り得た情報を楽しく報告するためにかかるたやヒントの内容を選択・整理したりしながら学びを進めようとする。

[主体的に学習に取り組む態度]

4 指導計画(9時間扱い)

学習過程	次	時配	学習活動	評価規準
見出す	第1次	2	○休校明けに行った生活科の学校探検を想起し、今回は杜小の先生や働いている人たちについて知り得た情報を「先生かるた」にして伝え合うという目的を理解する。	・教師が作成した「先生かるた」を解き、他の先生や働く人についても知りたい・かるたを作りたいという気持ちを持ち、かるたとヒントに盛り込まれている内容を理解している。 [主] [思判表 話聞]
			○話を聞きたい相手と、聞きたいことについて考え、質問の仕方や内容を話し合う。(インタビューの仕方)	・今までの話し方を振り返り、相手に応じた言葉づかひ、どのような内容をどのような話し方で伝えたらよいかを考えている。 [知・技] ・知りたいことの内容を選択している。 [主] [知・技]

自分で取り組む	第2次	2	<p>○友だちと話し合い、聞きに行く（インタビューをする）練習をする。</p> <p>○話を聞きに行く。</p>	<p>・聞きたい相手と聞きたいことを決め、一緒に聞きに行く友だちと聞くことを分担し、相手に応じた言葉づかいを考えて練習している。 〔知・技〕〔思判表 話聞〕</p> <p>・言葉づかいやあいさつの仕方、話の聞き方に気をつけてインタビューをしている。 〔知・技〕</p>
	第3次	1	<p>○聞いたことを思い出しながらメモに整理する。</p>	<p>・自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えている。 〔思判表 話聞〕</p>
広め深める	第4次	2	<p>○メモを元に、インタビューした先生のキーワードを入れた読み札をリズムのあるフレーズでつくる。</p> <p>○キーワード以外の情報をヒントとして整理し、ヒントにする順番を話し合う。</p>	<p>・どの情報をキーワードとして、かかった読み札に入れたらよいかを考えている。 〔主〕〔知・技〕</p> <p>・聞き手の反応を想像しながら、ヒントを出す順番を考えている。 〔思判表 話聞〕</p>
			第5次	1
まとめあげる	第6次	1 (本時)	<p>○「先生かるた」で遊び、知り得た情報を伝え合う。</p>	<p>・読み手が知らせたいことを落とさないように集中して聞いている。 〔思判表 話聞〕</p> <p>・声の大きさや速さなどを工夫して話している。 〔思判表 話聞〕</p> <p>・「先生かるた」で遊ぶことを通して、互いの新たな発見が伝わった喜びを感じている。 〔主〕</p>

5 本時の指導（9/9）

（1）目標

- ・読み札の読み方やヒントの出し方に気をつけて話したり、読み手が知らせたいことを落とさないように集中して聞いたりして、かるた遊びに参加している。〔思判表 話聞〕

（視点1） 声の大きさや速さなどを工夫し、聞き手の反応を見ながら話している。

（視点2） 読み手のキーワードとヒントをよく聞いて、かるたを当てようとしている。

- ・「先生かるた」で遊ぶことを通して、互いの新たな発見が伝わった喜びを感じている。〔主〕

（2）展開

時配	学習内容と学習活動	○指導と支援 ※評価	資料
3	1 本時の学習活動を確認する。	○学習計画表を使いながら本時の学習内容と課題について確認させる。	学習計画 掲示物
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>㊟グループたいこう「先生かるた」であそぼう。</p> <p>～よみふだと 3つのしつもんで 先生をさがしだせ！～</p> </div>		
5	2 かるた遊びの流れを確認する。 ①読み手グループが読み札を読む。 ②聞き手側が合の手を入れる。 ③読み手グループは一つずつヒントを出す。 ④聞き手側はグループごとに相談をしてどの先生の札を取るのか決める。 ⑤読み手グループの合図で聞き手グループは札を取って上げる。 ⑥読み手グループが正解を言う。	○グループで協力して答えを導き出すことを確認する。 ○読み手の合図はしっかりと聞くこと、合図までは手を挙げて質問をしてもよいことを伝える。 ○感想は読み手に対するの感想を言うことを伝える。	かるた遊びの 進め方掲示物
30	3 グループ対抗「先生かるた」遊びを行う。 例) ・「では、読みます。『おいしいね えいようしっかかんがえる ラッキーにんじんおおあたり』」 ・「ねえ、ねえ、もっと知りたいな。ヒントを3つ聞かせてよ。」 ・「この先生は実はにんじんがきらいなのです。」 ・「この先生は、〇〇先生より髪の毛が長くて一つにしばっています。」 ・「この先生は、お昼の放送で元気な声を聞かせてくれます。」 ～ 相談タイム ～ ・「先生かるた はい、どうぞ。」 ・かるたを取る。	○勝敗にこだわらず、読み手は練習の成果を発揮する場面であること、聞き手は集中して答えを導き出し、お互いが楽しさを味わえるような雰囲気作りを心がける。 ※声の大きさや速さなどを工夫し、聞き手の反応を見ながら話すことができる。〔思判表 話聞〕(発表) ※読み手のキーワードとヒントをよく聞いて、答えを導き出そうとしている。〔思判表 話聞〕(活動の様子) ※「先生かるた」に楽しく参加したり、感想を述べるができる。 〔主〕(活動の様子・発表)	先生かるた 読み札 ヒントカード

7	<p>・「正解は◇◇先生です。」 4 学習を振り返る。 ・本時の自己評価を行う。 ・単元の学習全体を振り返る。</p>	<p>※今までの活動や遊ぶことを通して、 伝わった喜びを感じ、今後に生かす 気持ちをもつことができる。 〔主〕（振り返りシート）</p>	<p>振り返り シート</p>
---	---	--	---------------------

板書計画

<p>学びほうのふりかえり</p>	<p>先生かゝた 絵札（写真）</p>	<p>先生かゝた 絵札（写真）</p>	<p>先生かゝた 絵札（写真）</p>	<p>先生かゝた 絵札（写真）</p>	<p>かゝた喜びのまわし方</p>	<p>③ 「グループたいこう」「先生かゝた」であそぼう。 「よみかた」と二つのしつもんて先生をさがしたせう。</p> <p>もっとしりたいな もり小の先生たち</p>
	<p>発表が終わった読み札 ヒントカード</p>				<p>読み手の願い 話し手の願い</p>	

[資料 実態調査の項目]

1) つけたい力に関する実態

① 経験したことやテーマの中から話題を選び、姿勢や口形、発声や発音に注意して話すことができるか。

- | | |
|---|-----|
| ア 姿勢や口形、発声や発音に注意することが難しい。 | 2名 |
| イ 姿勢や口形、発声や発音に注意しようとしているが、伴わない。 | 4名 |
| ウ 決められたことであれば、姿勢や口形、発声や発音に注意して話すことができる。 | 9名 |
| エ 自分で話題を選び、姿勢や口形、発声や発音に注意することができる。 | 11名 |

② 相手の反応に応じて声の大きさや速さなどを工夫することができる。

ア 相手が聞きたくくなるような話し方の必要条件について十分に理解している。

- | | |
|-----------|-----|
| *必要条件 | |
| ・適切な声の大きさ | 26名 |
| ・話す速さ | 26名 |
| ・聞き手を見る | 26名 |

イ 必要条件を一つでも自ら実現させてはなすことができる。

- | | |
|-----------|-----|
| ・適切な声の大きさ | 20名 |
| ・話す速さ | 14名 |
| ・聞き手を見る | 18名 |

③ 読み手が知らせたいことを落とさないように集中し、聞くことができる。

- | | |
|--------------------------|-----|
| ア 最後まで集中すること、聞くこと共に難しい。 | 3名 |
| イ 集中は途切れるが、聞き取れている。 | 3名 |
| エ 集中しているが、聞き取れていないことがある。 | 8名 |
| ウ 最後まで集中し、正しく聞くことができる。 | 12名 |

2) 表現する内容の準備状態に関する実態

① 共通・相違・事柄の順序などの情報と情報との関係について理解し、話や文章で表現することができる。

- | | |
|---|-----|
| ア 情報と情報との関係について理解できていない。 | 3名 |
| イ 情報と情報との関係について理解しているが、話や文章で表現することは難しい。 | 10名 |
| ウ 情報と情報との関係について理解しており、話や文章で表現することができる。 | 12名 |

視点1 想像できる話し手

～聞き手の反応を促す情報整理～

○リズムあるフレーズを意識した「先生かるた」の読み札作りと共通点・相違点を入れたヒント作り

学校の先生にインタビューをして知り得た情報を「先生かるた」の読み札と答えを導き出すためのスリーヒントにして「先生かるたで伝え合う」という活動を試みた。読み札は、聞き手が受け入れやすいリズムのあるフレーズを意識させ、グループで知恵を出し合いながら作ったスリーヒントは、出す順番にこだわりをもたせて、より聞き手がわくわくする準備をすることを心がけた。その中で、今回特に「想像できる話し手」を意識して取り入れた活動は、下記の4つである。

(1) その先生ならではの情報を得るためのインタビュー作戦会議

今までの学校生活や経験の中で誰もが共有しているであろう情報と、インタビューをするからこそ得られるであろう情報を考えながら、その先生ならではの情報を得るためのインタビュー内容を精選する話し合いの場を設けた。コロナ禍で、初めてのグループでの話し合い活動であったため、あらかじめ個で準備したインタビュー内容を教師がチェックし、同じ内容や似た内容についての取捨選択や分担を話し合わせたり、話し合う中で新しく聞いてみたくなったことを加えたりさせた。また、インタビューの際には、答えてくださった情報に対して反応したり、自分との共通点・相違点を伝えたりしながら、相手に応じた言葉遣いで言葉のキャッチボールを楽しむように日常活動の中で意識しながら生活させた。(朝の会の「日直のスピーチ」・帰りの会の「今日のキラリ」等)



児童のインタビューノート：わかったことはインタビュー後に記入した

(2) リズムあるフレーズを意識した「先生かるた」の読み札作り

知り得た情報を伝える手段の一つとして「先生かるた」の読み札作りに挑戦した。児童はこれまでに「のりものかるた」の読み札作りを経験したが、リズムのあるフレーズを意識した読み札作りは初めてである。今回は五七五七七のリズムに知り得た情報をのせるという方法で3人のグループで知恵を出し合い、読み札を作らせた。このリズムは1年生にとっては、数と言葉を一致させることが難しかったため、手拍子でリズムを感覚として捉え、手拍子にのせて言葉を選ぶように促した。



読み札作ノート：インタビューしたことからキーワードを出し合い、リズムをつけた読み札作りに挑戦した

(3) 共通点・相違点を盛り込んだスリーヒント作り

読み札だけでは伝えきれない情報を、スリーヒントとして「かるた遊び」の中に取り入れることにした。スリーヒント作りの条件として、みんながよく知っている人物等とインタビューをした先生を比較し、共通点や相違点を探しながらヒント作りをすることを提示した。また、ヒントを出す順番(話す事柄の順序)にこだわりをもたせた。



くらべっこノート：よく知っている人物との共通点や相違点をさがした



ヒントノート：スリーヒントの順番を相談した

(4) 読み札・ヒントを覚え、自分のものにする時間の確保

ゲーム的感覚(クイズ・かるた)で友達に情報を伝える経験を積む中で、顔を上げて相手を見て話すことが必要だということは理解しているため、作った読み札やヒントを覚え、自分のものにする時間を確保した。児童の実態から、時間を確保することにより、聞き手に楽しんでもらうためのアイデア(ジェスチャーや間の取り方、速さや強弱)が出され、その効果を試してみたいという前向きな気持ちと自信が生まれるであろうと考えた。

視点2 積極的な聞き手

～話し手も楽しくなる聞き手参加型の伝え合いの場～

○言葉のキャッチボールを意識した日常活動とかるた遊びのルール作り

(1)秘密のインタビュー訪問

あらかじめ児童からインタビューをしたい先生を聞き取り、意図的に3人グループを作った。学級には、どの先生にインタビューに行くのか、いつ・どこにインタビューに行くのかはお互いに「かるた遊び」の日まで秘密というルールを作り、ドキドキ感を味わえるようにした。60名以上いる職員の中の誰にインタビューをしにいくことになっているのか、どのグループがいつ・どこに・誰にインタビューに行くのかをお互いに秘密にし、ミッションを達成するようなワクワク感をもちながらインタビューの日を迎えることとした。



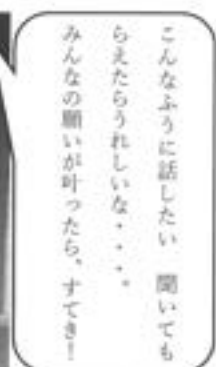
(2)言葉のキャッチボールを意識したインタビュー

積極的な聞き手には想像できる話し手が伴う。話し手の手立てと重なるが、インタビューの際には、答えてくださった情報に対して反応したり、自分との共通点・相違点を伝えたりしながら、相手に応じた言葉遣いで言葉のキャッチボールを楽しむように日常活動の中で意識しながら生活させた。(朝の会の「日直のスピーチ」・帰りの会の「今日のキラリ」等)



(3)年間を通した～みんなのねがい～

クイズやスピーチをするときに、どんなふうに話したいか、聞いてもらえたら嬉しいかをその都度確認をしたり、加えたりして年間を通して「1年1組のねがい」として意識させた。



(4)「あいの手」を取り入れたリズムと流れのある「かるた遊び」

話し手が読み札を読んだ後に、聞き手側が「あいの手」を入れるようにした。「かるた遊び」に一連の流れを作り、聞き手が声を出して話し手にヒントを促すことで、楽しく集中力を絶やさずに聞くことができるようにした。また、学級の実態から、個で取り札を取る勝負ではなく、グループで答えについて相談する時間を設け、みんなで一枚の取り札を選ぶというルールにすることで、勝負にこだわらず、落ち着いて最後まで話し手の情報を興味深く聞くことの一助となると考えた。



指導を振り返って

(1)視点1「想像できる話し手」に迫れたか

～聞き手の反応を促す情報整理が「想像できる話し手」の実現に功を奏したか～

本単元では、視点1の実現のために具体的には「リズムのあるフレーズを意識した先生かたるた読み札づくりと、共通点・相違点を入れたヒントづくり」を通して、聞き手の反応を促す情報整理を試みた。遊び心を大切に「かたるた遊び」を『他者に伝える』ゴールとして設定し【手立て1】、ゲーム感覚を取り入れたインタビュー作戦【手立て2】を実施した。また、リズムのある読み札づくりと、順番にこだわったスリーヒントクイズづくり【手立て3】に取り組むことで、インタビューの内容を吟味し、更に必要な情報を自分や身近な人との共通点・相違点といった視点で整理しながら他者に伝える読み札とヒントへ書き換えることに挑戦した。

その結果、自分や身近な人との共通点・相違点を伝えようとすることは、計画していたよりもたくさんの情報を聞き出す言葉のキャッチボールにつながり、インタビューの楽しさを味わうことができた。それは、質問をして終わり、スピーチを聞いて終わりではなく、その先の言葉のキャッチボールを楽しむことができるようになってきた元気で人とのやりとりが大好きな児童の姿からうかがわれる。日常生活の朝の会でのスピーチや帰りの会の「今日のきりり」でもそのやりとりは活発になった。

また、インタビューから得た情報をキーワードとして書き出し、リズムにのせるというリズムのある読み札づくりと、順番にこだわったスリーヒントクイズづくりの活動では、グループで知恵を出し合いながら新たなものを生み出すということを学んだ。3人グループの中の一人のつぶやきに、「その言葉、ぴったりだね。」「〇〇ちゃん言葉を入れてみよう。」など、一人では浮かばなかったアイデアがひらめいた瞬間や、今まで上手く関わられなかった友達から認めてもらった時の自己有用感と言うまでもない。スリーヒントは個で作ったものを持ち寄って厳選していったが、その活動の中でも、「わたしと同じヒントだね。」「似ているからどっちにする?」「これは〇〇くんだけだから、〇〇くんが出てね。」などのやりとりが多く聞かれた。自分のことだけではなく、相手を意識した会話ができるようになったことを感じた一コマであった。

遊び心を大切に「かたるた遊び」をゴールに設定したことで、読み札を読む際に、児童の中から過去の経験を思い出し「ジャスチャーをつけてみたい。」という意見が出された。各グループの工夫に任せてみたところ、読む(話す)側も楽しいし、聞く側を惹きつける一つの手段【手立て4】となり、その先生のことを知ってもらうために、その先生の好きな本を用意して提示するグループもあった。聞いてほしい、見てほしい、知ってほしいという思いは、どのようになりたいのかが見えてきた児童の動きであると思われる。

(2)視点2「積極的な聞き手」に迫れたか

～話し手も楽しくなる聞き手参加型の伝え合いの場が「積極的な聞き手」の実現に功を奏したか～

本単元では、視点2の実現のために、具体的に「かたるた遊び」にリズムと流れのある「あいの手」を取り入れること【手立て2】を試みた。つまり、聞き手側が読み札を聞き終わった後に、ヒントを促す「あいの手」を入れることにこだわり、うなづきの遊び版といった感覚を心がけた。また、視点1と重複するが、ゲーム感覚を取り入れたインタビュー作戦は、60名以上いる職員の中の誰にインタビューをしに行くことになっているか、どのグループがいつ・どこに・誰にインタビューに行くのかをお互いに秘密にしたことで、ミッションを達成するようなワクワク感をもちながらインタビューをする＝読み札のネタ・ヒント作りのネタを聞き出すという活動を行った。そして、この単元全体には、話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと等、全ての言語活動【手立て6】を取り入れた。

その結果、この「あいの手」は、その後の日常生活の中でも、もっと知りたい、教えてほしいと思った時に、自然と出てくる「あいの手」となった。しっかりと聞いていないとこの「あいの手」は出せない。遊びの中で、楽しく、自然と児童が「聞く」ことを意識できるようになるための手立てとしては有効であったと思われる。話し手側からすると、「あいの手」が入ると、聞いてもらっているという安心感にもつながった。また、インタビュー

の際には、読み札のネタ・ヒント作りのネタを聞き出すという目的がはっきりとしていたので、目を輝かせながら質問をしたり、自分や自分の身近な人と比較してどうかという言葉の返しをしたりして話を広げる場面を見ることができた。

(3)協働が実現できたか

「先生かるた」を作成していく過程で、今までは個で作りに出していたものを、グループで知恵を出し合いながら新たなものを生み出すという経験は、子ども達にとって初めてのことであり、教師の力を必要とする場面も多々あったが、初めての協働が実現できた一つの場面だと考える。

また、「かるた遊び」を作り上げていく中で、読み札を読んで、取り札を取るという一方からだけの発信ではなく、今回は、リズムと流れのある「あいの手」を入れたことにより、話し手側と聞き手側の双方向のコミュニケーションが生まれた。話し手側はもっと話したい、聞いてほしいという前向きな願いと聞いてもらっている安心感を、聞き手側は、もっと詳しく聞きたい、知りたいという前向きな願いを相互作用によってもつことができた。1年生にとって、今までにない、これからも持ち続けていきたい感覚を身に着けることができたと思う。

(4)子どもたちの姿からどんな言葉の力がついたか

学習指導案上でも述べたように本実践でつきたい力は5つあった。

- ①言葉には、経験したことを伝える働きがあることは、この「先生かるた」を通して、読み札を作った側も、取り札を取った側も、「〇〇さんと一緒だね。」「〇〇先生の好きなスポーツはぼくと一緒だ。」など、その先生の新しい情報を得たり、知らせたりでしたことで実感することができた。姿勢や口形、発声や発音に関しては、これからも引き続き根気強い指導が必要である。よい手本・モデルをたくさん身近に感じられる環境づくりに努めていきたい。
- ②共通・相違・事柄の順序など情報と情報の関係については、「先生かるた」のヒント作りの過程で意識させることができた。ヒントを出す順序を考える場面では、個人差があり、教師の助言が必要な場合もあったが、3人グループの組み合わせによっては、友達同士でヒントの順序を練り合う姿が見られた。自分との共通点や相違点を見つけ出すことに関しては、比較するためのワークシートを用い、ほぼ全員が達成することができた。
- ③インタビューしたことやその場の様子などから話題＝「先生かるたのネタ」が友達と重なってしまった場合、過去の経験(例えば一緒に遊んだり、声をかけてもらったりした時のこと)を思い出し、話す事柄を選択することができた。ただ、グループの中で精選しているため、個人を評価することは難しく、もっと多くの先生方にインタビューをしたり、読み札作りに挑戦させたりする経験が必要であった。また、新しく入学する1年生に先生紹介をする場面を設定するとしたら、誰をどんな言葉で紹介するのかを考え、読み札をリメイクしていく必要がある。
- ④聞き手との場、状況、反応に応じて声の大きさや速さなどを工夫し、楽しく話す力に関しては、読み札完成から、かるた遊びまでの期間を1週間とったため、聞き手の反応を想像しながら練習したり、楽しくするためのジェスチャーを加えたりすることができた。もっと多くのかるたを作る経験を積ませるか、読み札をあたためる時間の確保を大切にすることは最後まで指導する側で葛藤する選択であったが、今回は欲張らずにあたためる時間の確保を大切にすることにした。そうすることで、安心して「かるた遊び」の日を迎えられる児童も多くいたように思う。
- ⑤読み手が知らせたいことを落とさないように集中し、楽しみながら聞く力に関しては、読み手と聞き手が楽しくかけ合いながら報告し合える「かるた遊び」にしたことが効果的であった。事後のアンケートでは、全員が「また、かるた遊びをしたい。」と答えている。この経験を積むことにより、聞いてもらうためにはどのような

に情報の整理をしたらよいのか低学年なりに意識していけるのではないかと考える。

児童の作品（かるたの読み札）

かっこいい
モリムヤコシニえる
先生だ
すまねたがそのうたがたよ

げんきかまこえ
足がはやくて
せがたかい
すまねたスポーツ
バスケット

すーいよね
とびはこ八たん
とべますよ
てん車がすまね先生で
めがねをつけてて
やさしいよ

やさしいね
にんずうあおい
こどもたち
とびうおだいですま
つりもすま

やさしいね
いつもけがをなにおしくなる
ピンクのバラけんすまよ

しゅうすたね
ピク大すま
テフリフリ
ふんう大すま
うたもすま

せがたかい
にほんことでも
じゅうずだよ
ゲームねんないも
だいますまです

みんなにね
あいしゅうんぶり
あげますよ
コロケ大すま
カシーもすま

げんた又たよ
きめつめいはが
だいますまです
おーると
だみんとが
ちまわつこわら

1 単元名 4年生の心に残る！「日本の魅力」を発信しよう

2 単元について

(1) 単元観および系統

本単元は、本校の4年生に向けて、「日本の魅力」を伝えるプレゼンテーションを行うという目的のもと、必要な資料の収集・整理、そして効果的な発表の仕方やその聞き方を学ぶ学習である。ここでは、以下に示す力を身につけさせていこうと考えている。

- ①情報と情報の関係を理解し、思考に関わる語句を用いて、情報を結びつけ、発表原稿を構成する力
[知識・及び技能(1)オ]
- ②収集した情報と伝えたい内容の整合性を確かめ、情報を吟味、取捨選択して文脈の中で再構成する力
[知識・及び技能(2)イ]
- ③聞き手の興味・反応を想像して、複数の表現の工夫を用意し、発表の際に聞き手の反応を受け止め、それに応じて自分の発表の軌道を修正することができる力
[思考力・表現力・判断力等 A 話すこと・聞くこと ウ]
- ④発表を聞き、話し手が自分の発表を振り返ったり、新たな課題に気付いたりすることができるような感想や質問を伝える力
[思考力・表現力・判断力等 A 話すこと・聞くこと エ]

次に、本単元に関連する児童の学習履歴を示す。

児童は、4年生で「一枚の写真から想像できる事柄を書きまとめ、それをもとに話す」という、資料から読み取ったことを筋道を考えながら組み立て、わかりやすく説明する学習に取り組んだ。5年生では、「成田市の良さを3年生に伝えよう」という単元で、成田市の良さを多角的な視点から調査・精選したり、掲示資料を作成し、ポスターセッションという形で発表したりする学習経験を積んでいる。

本単元では、こうした学習履歴や系統を生かし、より聞き手の存在を意識して、必要な情報を選択したり、資料を編集・操作したりして、内容を効果的に伝えるプレゼンテーションに取り組む。

これからグローバル化が進む国際社会を生き抜く児童にとって、「情報、図や表を駆使し、効果的に自分の考えを伝える力」は欠くことのできない重要な資質・能力だと考える。今後、他教科の学習や実社会という実の場でもプレゼンテーションが活用されることを想定し、一つ一つ基礎的なことを確認しながら丁寧に進めていきたい。

発表のテーマには、「日本の魅力」を選択した。今年度、児童はコロナ感染拡大の状況の中、学校生活を共にしてきている。社会科では、輸出輸入の貿易関係を日本が世界中と結んでいることを学習してきたが、その一方で現在、国と国とを人々が往来することが困難な状況であることもメディアを通じて認識している。そして、その課題は国内、日本各地でも同じ状況下にあることもわかっている。

そこで本単元では、5年生の各教科でふれてきた「日本の魅力」についてさらに調査し、4年生に向け、プレゼンテーションを通して発信するという言語活動を設定した。日本には、古来から守り、受け継がれてきた伝統や文化、自然がある。日本にいながらにして、実際にその地に赴き、目で見て、手で触れることが難しい現状ではあるが、プレゼンテーションを通して、少しでも「日本の魅力」を感じてもらえるようにすることが、この言語活動の目的である。聞いてもらう相手は、4年生に設定した。社会科の学習では、3年生で成田市のこと、4年生で千葉県のことを主に学習し、5年生で日本全国へと視野を広げていく。5年生の国語科の学習では、世界遺産である白神山地の雄大な自然と向き合う。そして、家庭科の学習では、米、みそ、だし等、日本の食の奥深さにも触れる。プレゼンテーションは、自分たちの考えを相手に理解してもらうために行う表現様式であると同時に、プレゼンテーションの中で、または終えた後に聞き手の中に新しい考えや活力が生まれ、心を動かし行動に移すことができるようにするものだと考える。プレゼンテーションを終えた後に、4年生の心に少しでも児童の発表が残り、「日本の魅力」が残り、それを周りの方に伝えて共有していただけたら・・・日本の良さが様々な教科で感じられる5年生の学習に明るい展望をもっていただけたら・・・という願いを込めた単元である。

単元を通して常に「4年生の興味・関心を高める」「4年生にわかりやすく伝える」という相手意識・目的意識をもたせながら、情報収集、表現方法、構成、話し方について工夫を重ねていく。自分たちの発表内容を4年生に理解してもらうためには、収集した情報を解説した後に、相手にわかりやすい言葉や文章に変換、再構築していくことが求められる。そして、ただ原稿を「読む」だけではなく、内容を「伝える」ための工夫を加えていく必要が生じる。

他者との「話す」「聞く」という協働の中で、課題を解決するだけにとどまらず、「言葉による見方・考え方」を働かせながら、内容を精査・吟味し、新たな考えを構築できるような活動を、単元を通して展開していきたい。

「日本の魅力を発信しよう」のポイントは、以下の2点である。

- ①聞き手の興味・反応を複数想像し、それぞれの反応によって違う手立てが講じられるよう準備し、発表の場で生かす話し手。
- ②他のグループのプレゼンテーションを聞く際に、注視する視点を明確にもち、話し手の表現に共感する部分と指摘する部分を併せもつ聞き手。

上記の2点を授業者が自覚しながら指導を展開していくことで、本校が目指す「想像する話し手」と「積極的な聞き手」の姿を現実のものとしたい。

(2) 児童の実態 (男子19名、女子18名、計37名)

以下の点についての実態の把握に努めた。

ア つけたい力に関する実態

イ 単元で展開する言語活動の準備段階に関する実態

具体的な調査の結果については、本指導案の最後に資料として掲載した。以下、調査結果を総括して述べる。

上記アに関する実態としては、つかんだ情報がどのような関係性をもっているのか、理解することができている児童が多く見受けられる反面、情報を思考に関わる語句を用いて、つなぎ合わせるができる児童は、半数にとどまった。このことから、情報同士を結び付けるのにふさわしい言葉を選択し、表現の中で使う機会を意図的に設けていく。また、複数の資料から読み取った情報の中から、自分にとって有益な情報を取捨選択することはできても、それを目的に応じて効果的に文脈の中で生かすことには難しさを感じていることが伺える。児童がもつ情報を自分なりに解説し、理解することができる力を、情報を生かして考えを再構成するところまで高めていくには、手立てが必要である。話すことについては、話をしながら聞き手の反応をとらえることはできていても、その反応に合わせて、柔軟に話し方を変えたり、表現の工夫を加えたりといった、軌道修正を行うことができる児童はわずかであった。事前に相手の反応を想像させ、どのような工夫が効果的かを考えさせておくことで、実際に話す場で臨機応変に軌道を修正する「自己調整力」の涵養につながると考える。聞き手としては、話し手の考えを深めたり、新たな気づきをもたらしたりするようなコメントを伝えることは現状として難しいことがわかった。

一方、イの本単元の言語活動に対する準備状態の実態から、テーマに関して、自分なりの構想はもつことができているが、それをどのように表現していけばよいのかについては、戸惑いが伺えた。発表方法一つ一つの特性を共通理解する時間を設定し、内容との整合性を確かめながら、テーマに最も適した表現方法が選択できるようにしていきたい。

(3) 指導観

以上の実態を踏まえ、以下の点に留意して指導にあたる。

- 日常的言語活動として、「論理的思考と身につけたい表現の学年展開」(教育出版)の例(第5学年及び第6学年)を活用し、朝の会のスピーチや学習の中で、思考に関わる語句を用いて自分の考えを形成したり、述べたりする機会を設ける。その際、情報と情報の関係性がどの分類にあたるのかを学級全体で確認、共有する時間を積み重ねることで、情報の関係性を正確に理解し、適切に表現する力を培っていきたい。

- 情報の解説、整理、集約、再構成は繰り返しの活動の中で養われていく力だと考える。そこで、新聞記事を児童に渡し、記事（事実）の要約、記事に対する自分の考えを書きまとめるという活動を繰り返し行っていく。
- 児童が自ら課題を捉え、主体的に追究していくためには、テーマ（主題）の選定が要となると考える。テーマを決定する際には、児童の主観も大切にしつつ、レイティングを用いて、内容を吟味したり、精選したりしながら、客観的な視点でもテーマを選択することができるようにしていく。
（情報量、プレゼンテーションで表現することの適正、追究していく価値、聞き手の興味・関心）
- 瞬時に聞き手の反応に合わせて、話し方を変えたり、表現の工夫を加えたりすることは難しいため、事前にプレゼン中の（１）・（２）における聞き手の反応を複数想像し、それぞれに手立てを講じられるように、発表原稿に付箋で色分けして明示する。
 - （１）聞き手に働きかける場面
（オリエンテーション・問いかけ・クイズ・資料を提示・手で指し示す等）
 - （２）伝えたいことを強調した場面
（声の強弱、速度の緩急、期待させる間等）
- どのような表現の工夫を感じた時に興味・関心をもったか、内容をわかりやすく表現できていたか（共感する部分）や、どのような時にさらなる工夫の必要性を感じたか（指摘する部分）を聞き手が具体的に伝えることができるように、聞く際の視点を（内容情報）と（表現情報）に分け、個々に役割をもたせるようにする。また、プレゼンテーションの後の意見交流は、同じ視点同士をグルーピングし、その視点について詳しく追求することができるようにする。それにより、話し手の考えを深めたり、新たな気づきをもたらしたりすることができるような話し合いにつながると考える。
- プレゼンテーションにおける様々な発表方法についてのモデルを教師側で準備しておき、発表場面がイメージできず困っている児童にはみせて、活動の見通しをもたせる一助とする。
- 毎時間や単元の終わりに自分の発表を、聞き手の感想や質問、助言からだけではなく、学習過程全体や自分の工夫の良さも含めてメタ認知的・肯定的に振り返る機会を設け、言語化させる。活動を通して獲得した目的や場、相手に応じた話し方を自覚していくことで、今後の学びに生かすことができると考える。

3 単元の目標

- 伝えたいことの内容を考えた、思考に関わる語句を用いて文章を構成することができる。
[知識・及び技能（１）オ]
- 収集した情報の中で、必要な部分を抜き出し、自分の考えを形成することができる。
[知識・及び技能（２）イ]
- 聞き手の反応を複数想像し、手立てや工夫を考えたり、実際の場で生かしたりすることができる。
[思考力・表現力・判断力等 A 話すこと・聞くこと ウ]
- 視点を明確にもち、相手の話の中心や工夫をとらえ、考えをまとめて伝えることができる。
[思考力・表現力・判断力等 A 話すこと・聞くこと エ]
- 常に自分たちが伝えたいことは何かを意識し、繰り返し内容を検討したり、調整したりしながら学び続けようとする。
[主体的に学習に取り組む態度]

4 指導計画（10時間扱い）

学習過程	次	時配	学習活動	評価規準
見出す	第1次	1	<p>○学習活動のゴールを知り、フローチャートを用いて学習計画を立てることによって、活動の見通しをもつ。 (グループの進捗を確認する場面でもこのツールを活用していく。)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>4年生の心に残る！ 「日本の魅力」が伝わる プレゼンテーションをしよう。</p> </div> <p>・全体でレイティングを生かした話し合いのもと、テーマを決定し、グループごとに樹形図を用いて伝えたいことの柱(中心)について考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>(樹形図)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">受け継ぎ守っている人</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">良さは他にはない</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">歴史</div> </div> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;">和食の魅力</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">自分たちが4年生に伝えたいこと(テーマ)</div> <div style="font-size: 2em;">←</div> </div> </div>	

			<p>○相手の反応を複数想像して、発表の場でとる手立てや工夫について考える。</p> <p>(1) 聞き手に働きかける場面 (オリエンテーション・問いかけ・クイズ・資料を提示・手で指し示すなど)</p> <p>(2) 伝えたいことを強調した場面 (声の強弱、速度の緩急、期待させる間等)</p> <p>○グループ内で発表の練習を聞き合ったり、タブレットで録画したりして、発表内容・方法・資料の提示の仕方を検討する。</p>	<p>・聞き手の反応を想像して、様々な表現の工夫を考え、付箋に書いている。 [思・判・表][主]</p> <p>・伝える相手を意識して、話し方や表現を工夫しながら、発表練習に繰り返し取り組んでいる。 [思・判・表][主]</p>
広げ深める	第3次	2 (本時) 2/2	<p>○他のグループと発表を聞き合い、プレゼンテーションを通して伝えたい「日本の魅力」を効果的に表現することができているか、相互評価を行い、助言し合う。</p> <p>・他者からの助言や自分の発表を振り返り、原稿を推敲したり、次時はどのように発表に臨むかという見通しをもったりする。</p>	<p>・相手の興味・関心や反応をとらえ、表現を工夫している。 [知・技][思・判・表]</p> <p>・聞く視点を明確にもち、相手に具体的なコメントを伝えている。 [思・判・表]</p> <p>・コメントや自己の振り返りから原稿を修正したり、次時の活動の目標をもったりしている。 [主]</p>
まとめあげる	第4次	2	<p>○前時にたてた目標を確認し、4年生の前で「日本の魅力」を伝えるプレゼンテーションを行う。</p> <p>・個々に学習活動全体を振り返り、目的や場、相手に応じた話し方等、学びを言語化してまとめる。</p>	<p>・相手を意識し、資料を用いた効果的な発表をしている。 [知・技][思・判・表]</p> <p>・課題を追求した自分自身への気付きや変容を言葉で表現している。 [主]</p>

5 本時の指導(8/10)

(1) 目標

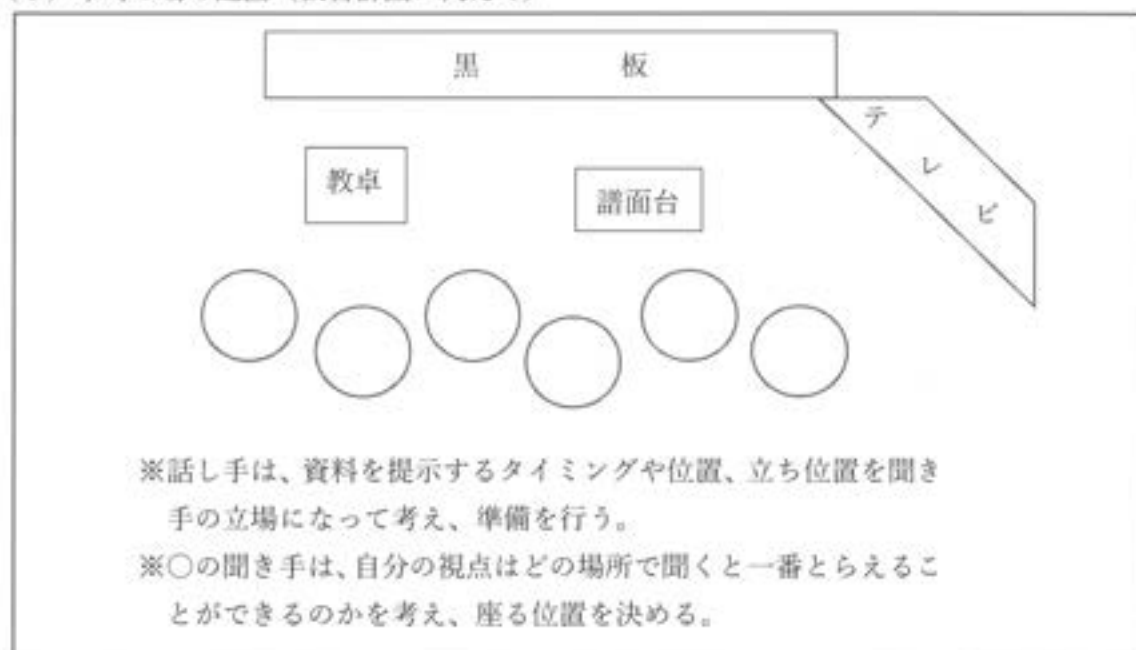
- ・発表の中で、思考に関わる語句を用いて、内容をわかりやすく表現している。 [知・技]
- ・伝えたいことの内容を考慮して発表したり、相手の興味・関心や反応をとらえて表現を工夫したりしている。 [思・判・表 話聞]
- ・聞く視点を明確にもち、相手に具体的なコメントを伝えている。 [思・判・表 話聞]
 - (表現情報) 視点1 声の強弱、話す速さ、間
 - 視点2 視覚資料提示のタイミング、資料と発表内容の整合性
 - (内容情報) 視点3 話の構成(順序)、つながり言葉の使い方、言葉・内容のわかりやすさ
- ・コメントや自己の振り返りから原稿を修正したり、次時の活動の目標をもったりしている。 [主]

(2) 展開

時配	学習内容と学習活動	○指導と支援 ※評価	資料
1	1 フローチャートを用いて、本時の学習の課題をつかみ、見通しをもつ。	○本時の学習がどの段階にあたるのか、思考ツールを用いて可視化し、把握しやすくする。	フローチャート図 (模造紙)
	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px auto; width: fit-content;"> <p>④ お互いの発表を聞き合い、</p> <p>「日本の魅力」が伝わるプレゼンテーションにしよう。</p> </div>		
2	2 発表を聞き合う際の流れや話し手、聞き手の役割を確認する。	○グループごとに分かれた際に、児童同士の声の掛け合いで活動が進行するよう、全体で学習の流れを確認する。	
2	3 グループごとに各教室に分かれ、プレゼンテーションを行う。 (12チーム(3・4人グループ)が3チームずつ4部屋に分かれて授業展開)	○発表者に聞き手への伝わり方を意識した準備になっているか、声をかけ確認する。 ○自分の視点はどこを注視すべきなのかを明確にもって発表が聞けるよう、促す。また、自分の視点はどの位置から一番捉えることができるかも考えて聞く位置を決める。 ○視聴覚機器での映像や模造紙などの資料を各教室に事前に配置しておくことでスムーズに準備に入ることができるようにする。	パソコン 書画カメラ 模造紙 ポスター
1 (2)	4 事前準備 1分 発表者：伝えたい内容・目的の確認 聞き手を意識した、立ち位置 資料の高さ・位置の調整 聞き手：自分の視点の確認 聞く位置を考える。		
4 (8)	5 プレゼンテーション 4分 発表者：原稿をもとに、資料を用いながら、「日本の魅力」について伝える。 始め (概要・話の方向付け) 30秒 中 (柱1・柱2・柱3の順にプレゼン) 各1分 終わり (まとめ) 30秒 聞き手：話し手が伝えたいことの内容や聞く視点について意識しながら聞く。	※発表の中で、思考に関わる語句を用いて、内容をわかりやすく表現している。 [知・技] (観察・ビデオ記録) ※聞き手の反応をみながら、話をしたり、資料を提示したりすることができている。 [思・判・表 話] (観察・ビデオ記録)	ビデオ カメラ 発表原稿 (話し手) ワーク シート (聞き手)
10 (20)	6 意見交流 10分 (3分×3グループ) 視点ごとにグループになり、感想や質問を伝えたり、視点について意見を交流したりする。	※自分の視点について、どのような工夫から発表者の伝えたいことが伝わってきたのかやどこにさらなる工夫が必要だと感じたかを具体的に話している。 [思・判・表 聞] (観察・ビデオ記録・メモ)	

<p>視点1の交流より AB（聞き手）C（話し手） A「私は、『和食の歴史はいつから始まったと思いますか?』という問いかけの後に長めの『間』があったことで、問いかけられたことについて、しっかり自分の考えをもってから、続きの話を聞けたし、問いかけの答えが気になった。きっと問いかけの後に、この『間』をおくことで、4年生も関心をもって続きを聞いてくれるんじゃないかな」 B「確かに。問いかけの後の『間』は効果的だったと思ったけど、そのあとの2回の『間』は、どうしてあけたのか理由がわからなかった。どんな考えで『間』をあけたのか教えてくれる。」 C「歴史上の大きな時代の変化、その時に『和食』にも変化があったことを『間』を開けることで表現したかったんだけど・・・他の方法で、変化が伝えられるよう、工夫の仕方を考えてみるね。」</p>		
3 (6)	<p>7 発表者は、聞き手との対話や発表の振り返りから原稿に修正を加えたり、次時に向けて考えをまとめたりする。 ※ここまでの流れ(4～7)をもう1グループで繰り返す。</p>	<p>※自己の学びを言語化してまとめ、次時の目標を明らかにしている。 [主] (ワークシート)</p>
4	<p>8 今日の学びを振り返るとともに次時の学習内容・目標を確認する。</p>	<p>○次時にすべきことは何かを一人一人がもつことができるよう、考えを構築する時間をとる。</p>

(3) 本時の場の配置 (板書計画に代えて)



[資料 実態調査の項目]

1) つけたい力に関する実態

- ①情報と情報との関係を理解し、思考に関わる語句を用いて文章を構成できるか。
- ア 情報と情報の関係を捉えることが難しい。 2名
- イ 情報と情報の関係は捉えることができるが、思考に関わる語句を用いてつなげることができない。 18名
- ウ 情報と情報との関係を理解し、思考に関わる語句を用いて文章を構成できる。 17名
- ②多様な情報の中から必要な部分を取捨選択し、自分の考えに生かすことができるか。
- ア 情報の中から必要な部分を抜粋することが難しい。 2名
- イ 情報の中から必要な部分を抜粋することはできるが、自分の考えに生かすことはできない。 24名
- ウ 情報の中から必要な部分を取捨選択し、自分の考えに生かすことができる。 11名
- ③聞き手の反応を捉え、話し方を変えたり、工夫を加えたりすることができるか。
- ア 話しながら、聞き手の反応をとらえることができない。 5名
- イ 聞き手の反応はとらえられるが、その場で変えることはできない。 25名
- ウ 聞き手の反応をとらえ、それに合わせて話し方を変えたり、工夫を加えたりすることができる。 7名
- ④話し手の内容や表現の工夫をとらえ、適切な感想や質問を伝えることができるか。
- ア 話し手の内容や表現の工夫をとらえることができない。 2名
- イ 話し手の内容や表現の工夫をとらえることはできるが、適切な感想や質問を考えることができない。 20名
- ウ 話し手の内容や表現の工夫をとらえ、適切な感想や質問を伝えることができる。 15名
- 2) 表現する内容の準備状態に関する実態
- ①「日本の魅力」として伝えたい事柄やどのように表現するかを明確にもつことができるか。
- ア 「日本の魅力」が思いつかない。 2名
- イ 「日本の魅力」は思いついたが、どのように表現したらよいかわからない。 24名
- ウ 「日本の魅力」として伝えたい事柄やどのように表現するかを明確にもつことができているか。 11名

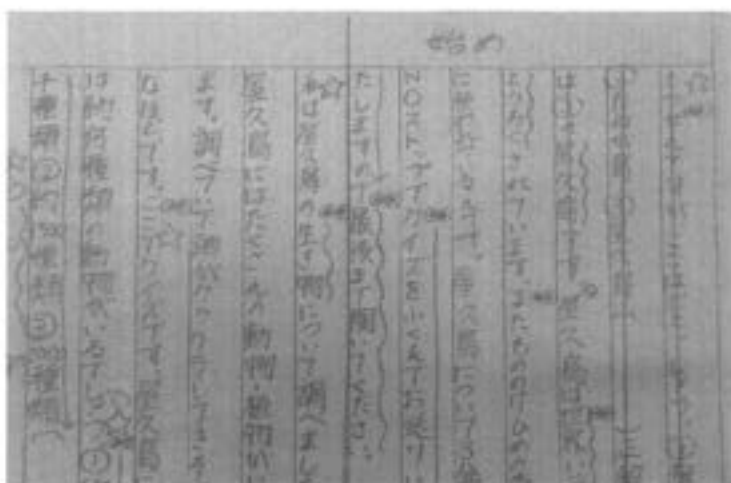
視点1 想像できる話し手

～聞き手の興味や反応を想像した発表の構成・学びの言語化～

4年生に「日本の魅力」を伝えるプレゼンテーションを行うことを目的とし、学習活動に取り組んだ。その中で今回特に「想像できる話し手」「積極的な聞き手」の実現に向けて取り入れた活動は、下記の通りである。

(1) 明確な相手意識をもち、話し方や表現、内容を工夫していくことができる単元構成

単元全体を通して、常に「4年生の興味・関心を高める」「4年生にわかりやすく伝える」という相手意識をもって活動を進めた。グループごとにテーマを選定する際には、自分たちの「調べてみたい、プレゼンテーションで伝えてみたい」という主観も大切にしつつ、選択した内容が4年生にとって興味・関心をもてるものかどうかという、聞き手を意識した客観的な視点からもテーマを絞っていくように促した。また、発表原稿を作成する際には、資料提示や指で指し示す、間をとる等、どのような表現の工夫を加えたら、聞き手に興味・関心をもたせることができるかを考え、原稿用紙にマークで書き込んでいった。児童は、聞き手の考えや様子を想像しながら、何度も原稿を読み返し、この瞬間だと思ふ部分に、「彩りマーク」を書き入れていた。聞き手に特に伝えたい内容はどの部分なのかを考え、自己内対話をしたり、グループで聞き合ったりを繰り返していく中で、言葉や文章が精選されていった。



彩りマーク

- ☞ 指や手で資料の注目部分を指し示す
- 👁️ 聞き手の反応をみる
- ～ 強調して話す
- 【 】 間をとる
- ☆ 資料提示のタイミング

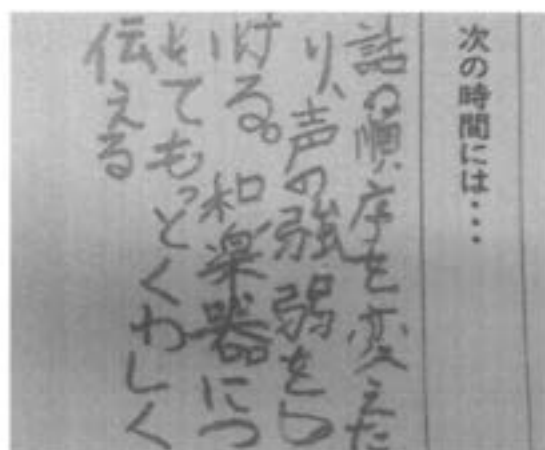
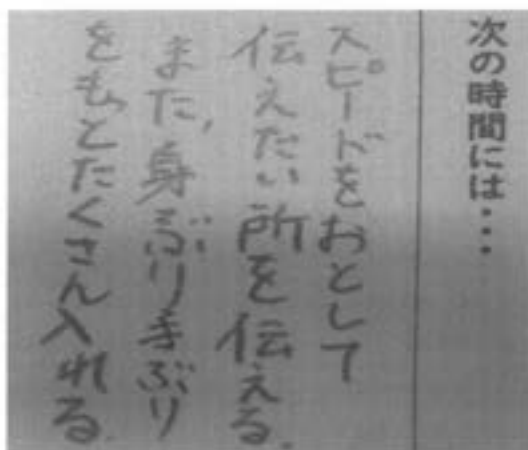
(2) 話す前に聞き手の反応を予想した上での手立ての準備

発表の中で相手の反応をとらえ、表現の工夫を加えるため、事前に聞き手の反応を複数想像し、そこから相手の興味・関心や情報量を予測し、どのような手立てを講じるか、色分けした付箋に書き、原稿用紙に添付していった。

常に聞き手の反応を捉えながら発表したり、反応に応じた手立てをとったりすることは、難しいと考え、今回は特に①聞き手に働きかける場面と②伝えたいことを強調する場面の2か所に焦点をあてて、反応を考えさせた。その際に、①・②の場面の発表内容に4年生が生活の中や既習を通して知っている言葉や情報がどの程度含まれているのか、興味・関心をもてる内容かどうかを問ひかけ、様々な聞き手の様子や反応を考える時間を確保した。

【次時に向けて】

本時の目的や活動を思い起こした上で、「次時に自分はどのようにしていきたいのか」を考えさせた。個々の中で、自分の「学び」を見通す、「学び」を創っていこうとする主体的な姿がみられるようにしていきたいと考えた。



視点2 積極的な聞き手

～明確かつ独立した視点で発表を聞き、助言し合う活動～

(1) 共感と指摘の両面から発表をとらえるワークシート

ワークシートに聞き手が発表の中で感じた工夫や良さだけでなく、さらに発表をよくするために必要だと感じる工夫について書く欄を設けた。これにより、話し手が内容についてわかりやすく表現できていた部分(共感する部分)とさらなる工夫が必要だと感じる部分(指摘する部分)を具体的に伝えることができるようにした。

発表者	聞き手	聞き手	聞き手
発表者	②	①	③
発表内容	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。
感想	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。
アドバイス	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。

発表者	聞き手	聞き手	聞き手
発表者	③	③	①
発表内容	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。	発表者が、和楽器の演奏をしながら、歌をうたいました。
感想	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。
アドバイス	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。	和楽器の演奏が、とても上手で、とても好きです。

(2) 聞き手の立場を明確にする3つの視点

聞き手が「内容情報」1つと「表現情報」2つのあわせて3つの視点に分かれ、個々に役割をもって発表を聞くような学習活動を設定した。自分の役割が決まっていることで、児童はその部分に注視して発表を聞いていった。発表について話し手に話をする際にも、役割が分かれていることで詳しく表現していくことができると考えた。

(3) 考えを深める話し合いの場の設定

発表後の話し合いは、同じ視点で聞いていた、聞き手同士をグルーピングして行った。

これは、3つの違う視点の児童をグループにして話し合うよりも、同じ視点の児童同士を一緒にした方が、発表者の表現についてより深く追求したり、考えを広げたりしていくことができるのではないかと考えたためである。また、話し手にとっても自分の表現がどのように捉えられているのかを把握しやすくすることができるのではないかと考える。



指導を振り返って

(1) 視点1 「想像できる話し手」に迫れたか

～聞き手の興味や反応を想像した発表の構成・学びの言語化が「想像できる話し手」の実現に功を奏したか～

本単元では、具体的には「①明確な相手意識をもち、話し方や表現、内容を工夫していくことのできる単元構成、②話す前に聞き手の反応を予想した上での手立ての準備、③自分の学びを積み重ねる 活動の振り返り」を通して、聞き手の興味や反応を想像した発表の構成・学びの言語化を試みた。

- ① 「明確な相手意識をもち、話し方や表現、内容を工夫していくことのできる単元構成」は、【手立て1】
- ② 「話す前に聞き手の反応を予想した上での手立ての準備」は、【手立て2】
- ③ 「自分の学びを積み重ねる 活動の振り返り」は、【手立て6】に焦点を定めて行った実践である。

その結果、①ではテーマの決定から、表現方法や資料の選択、原稿作成、発表練習、お互いへの助言に至る全ての場面で、4年生の情報量や興味・反応を想像しながらの活動が積み重ねられていった。それは、児童が聞き手のことを考えながら発表原稿に「彩りマーク」を加えたり、内容を精選したりしている様子やグループ内で発表を聞き合い、助言する際の「資料を出すタイミングがよく、話とも合っていて説得力があったよ。これなら4年生も『なるほど』と納得してくれる」という4年生の視点を軸においた発言からも常に相手意識をもち、活動を進められていったことがうかがえる。また、4年生からのフィードバック(感想から伺える評価)の中には、話し方・表現の仕方・発表内容等、多くの点について良さが記入されていた。「歴史や文化がわかりやすく、魅力を感じた。」「5年生になった時、学習するのが楽しみ」「何気なく食べていたおにぎり(和食)の奥深さを感じた」「4年生では千葉県、5年生では日本全体を学習するなんて驚き」と新学年の学習へ希望をもっていることがうかがえた。

②では、5年生がもつ既存の「話す・聞く」のスキルをいかして、話す前から相手の反応を予想し、その反応が相手のどのような気持ちの現れで、どのような工夫を加えたら相手を惹きつけることができるかを想像することができていた。また、この手立ては話し手として発表することだけに捉われるのではなく、聞き手の表情やうなずきといった反応を確かめながら考えを伝えるという意識をもたせることへの一助にもなった。それは、児童が発表原稿の付箋に記した「首をかしげている→もっとくわしく説明する」「下を向

いたり、手いたずらをしたりしている→声を大きくてスピードを変える」等の具体的な聞き手の反応を想像している表現から何うことができる。

③ では、毎時間の前向きな学びの振り返り、次時に向けての主体的な課題設定を積み重ねていくことができた。それは、児童同士が助言し合う場面で、指摘する部分だけではなく、話し手の表現に共感し、今後の改善に向けて共に考える姿や活動における自己の学び、次にはこうしていきたいという展望をワークシートに記入することができていた姿から伺える。

(2)視点2「積極的な聞き手」に迫れたか

～明確かつ独立した視点で発表を聞き、助言し合う活動が「積極的な聞き手」の実現に功を奏したか～

本単元では、具体的には、「①共感と指摘の両面から発表をとらえるワークシート、②聞き手の立場を明確にする3つの視点、③考えを深める話し合いの場の設定」を通して、明確かつ独立した視点で発表を聞き合い、助言し合う活動を試みた。

①～③は、【手立て4】に焦点を定めて行った実践である。

その結果、発表を自分の視点で意欲的に聞き、その視点について明確な根拠や理由をもった助言を行うことができていた。児童が同じ視点ごとに集まり、話し手に助言をした際の会話を例としてあげる。

聞き手1 「発表の中で1番感じたのは、つなぎ言葉の使い方かな。もっと文と文をつなげる言葉、例をあげる『例えば』とか話をまとめる時に『このように』といった言葉を使うとより内容がわかりやすくなるよ。」

聞き手2 「私もつなぎ言葉は足した方が4年生に伝わると思う。だけど、1番に感じたことは、話の順序についてだな。小笠原に自生する花を先に取り上げてから、〇〇さん(話し手)が詳しく調べた2種類の花を説明するとさらに4年生に話が伝わると思う。」

話し手 「じゃあ、4年生への発表に向けてまず話の順序を確かめて、その後どのようなつなぎ言葉で文章をつなげていけばいいのか、原稿用紙を見ながら考えてみるよ。」

自分の聞く視点が明確になっていることで、どのような工夫が今後必要なのかをくわしく、的確に話し手に伝えることができていた。また、同じ視点で聞いていた児童の意見や考えに相違点や共通点があり、そこから考えが広がっていくという対話が生まれていた。話し手の言葉からは、聞き手の助言をもとに、自分の発表を今後どのように再構成していくかという、新たな気づきや目的が生み出されていることが伺える。

(3)協働が実現できたか

研究主題「話し手と聞き手のやりとりを通して協働が実現するような国語科授業の創造」を目指して実践を行った。今回の実践の中で、「協働の実現」に向け、児童が新たなものを生み出そうとしている姿がうかがえた活動は以下の2つだった。

学習過程「自分で取り組む」の最後の時間グループ内で発表を聞き合う場面

グループの中で、発表者(話し手)と聞き手の立場に分かれて、表現内容・方法・話し方・資料の提示の仕方等の様々な視点をもって、お互いの発表を聞き、よりよくするための考えや意見を出し合っていた。一人の児童の原稿にグループのみんなが集まり、使われていた難解な言葉を4年生にわかりやすい他の言葉に置き換えるための意見が交わされていった。また、資料の提示の仕方について話し合っているグループでは、始めから模造紙全てを見せるのではなく、切れ目を入れて

隠しておき、説明に合わせて必要な資料を広げていくことで、発表内容と資料に整合性をもたせるとともに、4年生の興味を惹きつけようとする姿が見られた。

学習過程「広げ深める」の他のグループと互いの発表を聞き合い、助言し合う場面

独立した視点で発表を聞いていた児童同士が集まり、話し合う際に、同じ視点の児童でも、共感する部分と指摘する部分は異なることがほとんどだった。話し手の発表について聞き手の受け取り方、考えたことが違う所から、発表のどの部分を根拠にしているのかということや今後どのようにしていったらよいのかという所に焦点をあてて、対話が繰り返されていった。話し手の中には、自分の発表に対しての聞き手の反応・捉え方は多様で、事前に様々な反応を想定しておくことの重要性に気付く児童もいた。

(4)子どもたちの姿からどんな言葉の力がついたか

学習指導案上でも述べたように本実践でつけたい力は、4つあった。

- ①「情報と情報の関係を理解し、思考に関わる語句を用いて、情報を結びつけ、発表原稿を構成する力」については、実際に、「知床が自然遺産に登録された理由は、～ということや…ということが評価されたからです。」(理由をあげる)、「例えば「もくねんさん」と名付けられた…」(事例をあげる)、「まず～次に…」(順序づける)、「杉の年齢は～これは、〇〇と比べると…ということになります。」(比較する)という思考に関わる語句を用いて情報を結び付け、発表原稿を作成することができた児童がいた。ただ、その人数は半数にも届かず、使用していた語句も上記の項目がほとんどで偏りがあった。情報を結び付け、個々の表現に即した語句を用いることができるようには、日常の中で「思考に関わる語句」を活用して表現する機会をさらに増やしていく必要があることを感じた。
- ②「収集した情報と伝えたい内容の整合性を確かめ、情報を吟味、取捨選択して文脈の中で再構成する力」については、発表原稿や資料から自分の得たい情報、伝えたい情報を選択することはできていることが伺えた。ただ、選択した部分をそのまま発表内容の中に引用するだけの児童もみられた。情報を活用し、事実に伴う自分の感想や意見を織り交ぜ、4年生にわかりやすく伝えるための言葉の置き換えを行い、文脈を再構成するためには、情報整理や情報活用を高めることが課題としてあげられる。
- ③「聞き手の興味・反応を想像して、複数の表現の工夫を用意し、発表の際に聞き手の反応を受け止め、それに応じて自分の発表の軌道を修正することができる力」については、一人一人事前に聞き手の興味や情報量を想像し、考えられる反応によって手立てが講じられるよう、付箋に記入しておくことができていた。本実践の中では、付箋の内容と聞き手の反応が重なり、考えていた手立てが実の場で生かされた児童は多くなかったが、このような活動を繰り返していくことで、聞き手の反応をあらかじめ予測し、実の場で捉えて、話し方や表現の方法を変えたり、工夫を加えたりする力(「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力」)を涵養していくことができるのではないかと考える。
- ④「発表を聞き、話し手が自分の発表を振り返ったり、新たな課題に気付いたりすることができるような感想や質問を伝える力」については、児童同士の会話や振り返りワークシートから相手の表現・内容の工夫の良さといった共感する部分やさらなる工夫が必要だと感じた指摘を含め、感想を伝えることができていた聞き手が大半であったことが伺える。しかし、話し手が自分の考えをもう一度思い起こして考えを形成したり、発表の内容が聞き手にとって十分であったかどうかを自己評価したりできるような質問は行うことができていないことがわかった。

成果と課題

成果と課題を記すにあたり、最初に本研究のキーワード（いずれも実現をめざしてきたこと）を以下に示す。本項では、全体を通してつかんできた成果と浮かび上がった課題を記述するとともに、それぞれがどのキーワードに関わった成果もしくは課題なのかということを示していく。

【本研究のキーワード】

- ア 協働
- イ 想像できる話し手
- ウ 積極的な聞き手
- エ つけていきたい言葉の力①
「情報と情報のつながりや関係を適切な言葉で表しながら説明する表現力」
- オ つけていきたい言葉の力②
「説明・表現の洗練（改善）につながるような反応を言葉にできる力」

(1) 成果

- 「他者に伝える」という単元のゴールを明確に設定しておくことで、「聞き手」のことを想像しながら言葉を厳選したり、収集した情報をわかりやすく書き換えたりと、常に相手意識を持ちながら活動を進めることができた。……………イ エ
- 1年生の「かるた遊び」、3年生の「スペシャルな読み聞かせ」等、学年の発達段階に応じた「話す・聞く」の言語活動を取り入れたことが、児童の興味・関心を高め、単元全体を通して学習に主体的に取り組むことができる要因となった。……………ア イ ウ
- 児童が一度書き上げた文章を「相手に伝える」という違った視点で再考し、書き換える活動を行った際、取り入れた情報を説明したり表現したりするために、使う言葉を精選したり、相手の興味がどこに向かうのかを想像し、内容提示の順番を考えたりする姿が見られた。……………イ エ
- 話し手のパフォーマンスを独立した別々の視点を設けて聞くことにより、自分がどの部分に注視して聞けばよいのかを児童に明確につかませることができた。それに伴い、話し手への指摘やコメントも焦点を絞り、的確に行うことができた。……………ア ウ オ
- 毎時間、常に「次にやりたいこと」「次にやるべきこと」の明確化を求める振り返りを行っていった。この振り返りの積み重ねにより、児童が主体的に自分の学びをメタ認知し、新たな課題を見出したり、達成できた部分から、自己効力感を高めたりすることにもつながっていった。……………ア イ ウ

(2) 課題

- 話し手は聞き手の反応を捉えて話し方や表現を変えることができたが、聞き手が実際にその時、どうしてそのような反応をとったのかを確認する、もう一段階踏み込んで互いの考えを擦り合わせる場面を設けることでより聞き手の反応を深く考えることができたのではないかと考える。イ ウ
- 発表を互いに聞き合いコメントをする際に、表現情報に対しての指摘が多く、知識があっても相手の説明・内容について洗練につながるような反応を言葉にして伝えられる児童は少なかった。話し方や資料提示といった表現情報に限らず、相手の内容情報を改善させるような言葉を表出できるようにするためには、さらなる手立てが必要である。……………ウ エ オ

- 本校の児童の実態として、知識や考えをもっている、自分を表現することに苦手意識を感じている児童が多くいることがあげられる。今回の研究を経て、児童の「話す・聞く」の主体性は、一時的に高まっていることを感じた。今後、研究で培ってきた力をいかに常時化させ、国語科に限らず、実の場で活かしていけるよう準備をしていくかが、課題となる。研究をさらに継続・深化させていき、「想像できる話し手」「積極的な聞き手」の育成に努めていきたい。・・・・・・・・・・・・・・・・・・アイウ